江坂地区公共下水道事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書

蔵人遺跡

1979

吹田市教育委員会・吹田市下水道部

序

蔵人遺跡は昭和35年、名神高速道路の建設の際に発見された遺跡です。当時、市教育委員会には即刻、発掘調査を実施する体制もなく、そのまま工事が続けられ、遺跡は再び高速道路の橋脚の下に埋もれてしまったのです。

それから10余年、周辺の開発も着々と進み、当時は一面に水田を残していたこの地も、住宅が建ち並び、下水道部の手によって公共下水管の敷設が着々と進行しつつありました。ところが昭和52年度の工事区は、ちょうどこの蔵人遺跡を貫通することとなったため、再び本遺跡が注目されることとなり、試掘調査によって、中世と古墳時代の遺構・遺物の存在が明らかとなりました。

教育委員会としては、工事巾わずか３ｍといえども、工事に先立っての発掘調査が必要であるとの判断により、下水道部と協議を重ね、今回の発掘調査となりました。公共下水道工事という性格から、工事の遅滞が住民の皆様に影響を及ぼすことが憂慮されたため、冬期という悪条件の下ではありましたが、教育委員会と下水道部工事課が一体となり、さらには関西大学考古学研究室の協力を得て、長期にわたる調査が実施され、工事は無事完了することができたのです。

また本書で明らかにされているように、多くの調査成果があり、江坂地区の歴史に新しい資料を提供したのです。

本書の完成を機に、調査にご協力をいただいた下水道部に感謝するとともに、今後、蔵人遺跡周辺の開発行為に際して、文化財保護の面から市民の皆様の多大な協力をお願いいたします。

昭和54年3月31日

吹田市教育委員会

教育長　中村勇一

例　　言

1．本書は吹田市下水道部による公共下水道事業の一関として行われた江坂地区下水管敷設工事にとなう埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査は昭和52年11月６日から、昭和53年２月12日まで行われた。

3．発掘調査は吹田市教育委員会が主体となり現地調査、資料整理から本書の編集に至るまでを社会教育課が担当した。調査経費は下水道事業費によった。

4．本書の執筆は藤原　学、福本　明が分担し、鍋島敏也、岩崎菜穂子、内田裕理子がこれを補助した。

5．本書の遺物番号は、本文、写真、挿図ともすべて統一した。

6．出土遺物実測図は、縮尺を４分の１に統一したが、特殊なものに限っては、そうでないものもある。遺物写真については縮尺を統一していない。

目　　次

第１章　発掘調査に至るまで……1
第２章　位置と環境……1
第３章　発掘調査の経過……4
第４章　層　　序……7
第５章　中世の遺構・遺物……9
第６章　古墳時代の遺構・遺物……26
第７章　近世の遺構・遺物……39
第８章　総　　括……41

―調　査　組　織―

調査主体　吹田市教育委員会
調査担当　藤原　学（関西大学考古学研究室・当時）
調査員　亀島　重則（市教育委員会）
〃　塩見　敬三（市下水道部）
〃　村田　秀二（　〃　）
調査補助員　福本　明（関西大学考古学研究室学生）
〃　米田　文孝（　〃　）
調査補助員　西崎　卓哉（関西大学考古学研究室学生）
〃　東　泰三（　〃　）
〃　谷川喜一郎（　〃　）
〃　中川真理子（　〃　）
〃　内田裕理子（　〃　）
〃　服部　聡志（　〃　）
調査協力　鍋島　敏也（大阪府文化財愛護推進委員）

挿図目次

第1図　周辺遺跡分布図 …… 2
第2図　蔵人遺跡位置図 …… 3
第3図　検出中の8号井戸 …… 5
第4図　現地説明会風景 …… 5
第5図　地区別図および遺構配置図 …… 6
第6図　E地区土層断面図 …… 8
第7図　1号井戸実測図 …… 9
第8図　1号井戸全景 …… 10
第9図　同　曲物井戸枠 …… 10
第10図　同　細部 …… 10
第11図　2号井戸実測図 …… 11
第12図　2号井戸全景 …… 11
第13図　2号井戸内部 …… 12
第14図　2号井戸縦板 …… 12
第15図　解体中の井戸枠 …… 12
第16図　3号井戸実測図 …… 12
第17図　3号井戸検出状況 …… 13
第18図　4号井戸実測図 …… 13
第19図　4号井戸(東より) …… 14
第20図　4号井戸(上方より) …… 14
第21図　7号井戸実測図 …… 14
第22図　7号井戸検出状況(西から) …… 15
第23図　7号井戸検出状況(上より) …… 15
第24図　8号井戸実測図 …… 15
第25図　8号井戸検出状況 …… 15
第26図　8号井戸竹籠細部 …… 15
第27図　9号井戸実測図 …… 16
第28図　9号井戸検出状況 …… 16
第29図　中世水路実測図 …… 17
第30図　中世水路細部 …… 17
第31図　石組溝実測図 …… 18
第32図　石組溝検出状況 …… 18
第33図　検出された石組(上より) …… 18
第34図　瓦の検出状況 …… 18
第35図　2号井戸検出小皿実測図 …… 19
第36図　3号井戸出土土器実測図 …… 19
第37図　10号井戸検出瓦器及び中世河道検出の瓦質火鉢実測図 …… 20
第38図　石組溝検出瓦実測図 …… 21
第39図　中世土器実測図 …… 21
第40図　土師質羽釜実測図 …… 23

第 41 図　出土瓦質羽釜実測図 …… 24
第 42 図　瓦質井戸枠実測図 …… 24
第 43 図　出土中世土器 …… 25
第 44 図　F地区検出状況 …… 26
第 45 図　F地区遺物検出状況 …… 27
第 46 図　木製品検出状況 …… 27
第 47 図　須恵器杯蓋検出状況 …… 27
第 48 図　土師器小型丸底壺検出状況 …… 27
第 49 図　木器検出状況 …… 27
第 50 図　E地区遺物検出状況及び土層断面図 …… 28
第 51 図　C地区溝状遺構検出須恵器実測図 …… 29
第 52 図　Ⅵ－a層出土土器実測図 (1) …… 29
第 53 図　Ⅵ－a層出土土器実測図 (2) …… 30
第 54 図　Ⅵ－b層出土土器実測図 …… 33
第 55 図　第2土器群検出状況 …… 33
第 56 図　Ⅶ層出土土器実測図 …… 34
第 57 図　第3土器群出土土器実測図 …… 34
第 58 図　Ⅷ層出土土器実測図 …… 35
第 59 図　第3土器群検出状況 …… 36
第 60 図　試掘調査出土遺物実測図 …… 36
第 61 図　その他の出土土器実測図 …… 37
第 62 図　B地区出土須恵器実測図 …… 37
第 63 図　須恵器甕検出状況 …… 37
第 64 図　出土古墳時代土器 …… 38
第 65 図　6号井戸実測図 …… 39
第 66 図　6号井戸各部 …… 40

付表目次

付表 1　発掘調査経過一覧 …… 5
付表 2　E地区基本土層序 …… 7
付表 3　3号井戸出土土器一覧表 …… 20
付表 4　E地区出土土器一覧表 …… 22
付表 5　Ⅵ－a層出土土器一覧表 …… 31
付表 6　Ⅵ－a層出土土器一覧表 …… 31
付表 7　Ⅵ－a層出土土器一覧表 …… 32
付表 8　Ⅵ－b層出土土器一覧表 …… 33
付表 9　Ⅶ層出土土器一覧表 …… 34
付表 10　第3土器群出土土器一覧表 …… 35
付表 11　Ⅷ層出土土器一覧表 …… 35
付表 12　試掘調査出土土器一覧表 …… 36

第１章　発掘調査に至るまで

昭和35年、名神高速道路が、吹田市を北東から南西に縦貫することとなり、その建設工事によって多数の埋蔵文化財が破壊された。丘陵部にあった須恵器窯跡は、ほぼ発掘調査されたが、これは本市では、それまで経験したことのなかった埋蔵文化財の一大調査活動であった。

このような中にありながら、工事の進行中に、たまたま発見されながら、正式な調査をうけることもないまま工事が完成し、遺跡内容が知られないままに埋没したものもいくつかあった。

ここに報告する蔵人遺跡もそのうちのひとつである。昭和36年11月11日、名神高速道路の工事現場をパトロールしていた鍋島敏也氏（現大阪府文化財愛護推進委員）は、江坂町２丁目付近において、橋脚基礎工事の土中より古墳時代の須恵器・土師器を発見した。

遺物はすでに原位置を離れていたものであるが地表下約 1.1メートルに黒色土層があり、遺物はその層から出土したらしいこと、遺物は、古墳時代の土師器を主体とし、古式須恵器を少量混入していること、さらに奈良時代の遺物も出土していることを観察し、この地に古墳時代の平地遺跡があることを確認した。工事の進行中でありながら発掘調査もされなかったが、昭和48年刊行された吹田市文化財地図には、「No.76 蔵人遺跡」として明記された。

以後発掘調査の機会には恵まれず、遺跡の内容については、依然不明のままであったが、昭和52年、吹田市下水道部工事課は、江坂豊津地区における公共下水道工事を推進するなかで、蔵人遺跡の範囲と考えられる名神高速道路橋脚下の側道部分に、直径 1.35メートルの下水管敷設工事が行われることとなり、市教育委員会との間で事前協議がもたれた。

その結果、遺跡範囲と考えられる部分を試掘することとなり、昭和52年９月、計５ヵ所の坪掘りを実施した。かつて遺物の発見された個所を中心に、工事部分延長 150メートルにわたって、古墳時代土器の包含がみとめられ、さらに、第２坪からは、中世期のものとみとめられる角形縦板式井戸（のち報告する２号井戸）が検出され、古墳時代から奈良時代・中世期にかけての複合遺跡であることが判明した。このため遺物出土範囲においては、工事にともなって全面発掘が必要であるとの結論に達し、昭和52年11月６日から発掘調査が開始された。

第２章　位置と環境

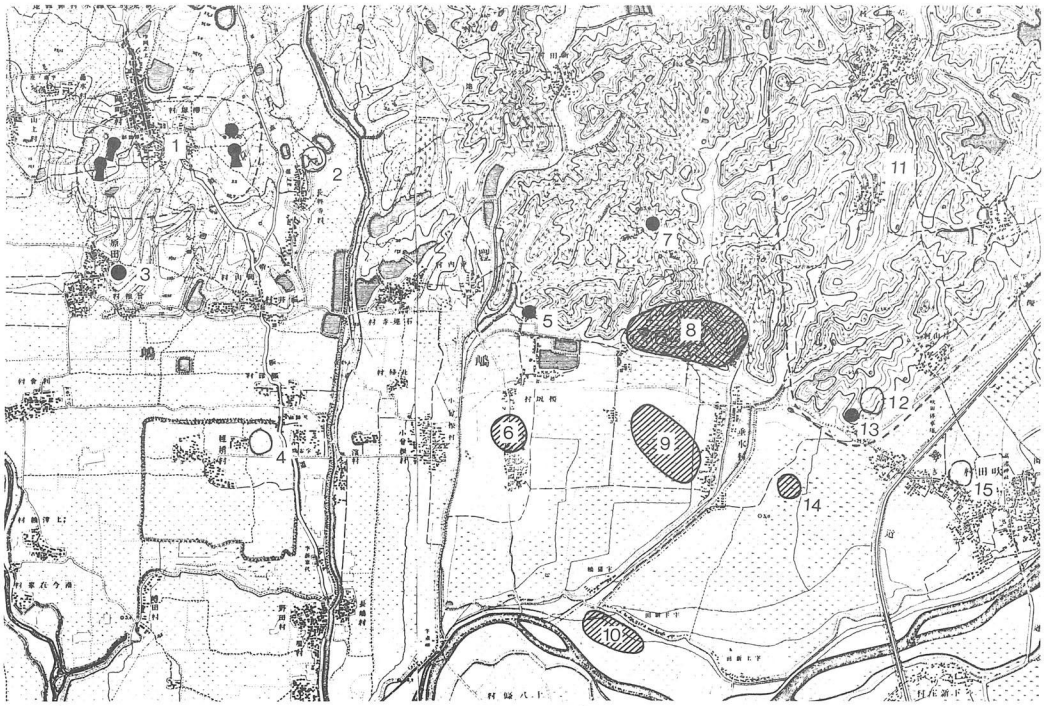
蔵人遺跡は大阪府吹田市江坂町２丁目に所在する。今回の調査個所は、下水管敷設工事部分に限られたが、遺跡範囲としては実際的には名神高速道路を狭んだ両側、すなわち江坂町２丁目と豊津町一帯がこれに含まれるであろう。地図で明らかなように西方 300ｍには高川が流れ、これが豊中市との市境であるから、蔵人遺跡は市の西部でも最西端に位置する遺跡なのである。

吹田市は昭和15年、旧吹田町を中心として、岸部村、千里村、豊津村の４個町村が合併して成立したのであるが、旧郡単位でいうと前三者は島下郡であるが豊津村のみは豊能郡（もと豊島郡）であり、本市は旧郡を越えて合併した市なのである。本市は北部から中部にかけて前期洪積層の隆起丘陵である千里丘陵が横たわる。その東～南～西にかけて展開する沖積平野を千里丘陵を中心として東西に区分されたのが、島下郡と豊島郡である。このうち、旧豊島郡に属する蔵人遺跡は最近急速に調査が進められてきた垂水南遺跡[1]と同様、猪名川の左岸の西摂平野の東端に位置する古墳時代と中世期の複合遺跡である。

蔵人遺跡を地理的にみると、千里丘陵南辺の沖積平野に立地する平地遺跡ということができる。地形図をみると、千里丘陵の南辺、特に豊中市原田から吹田市出口町に至るまでは弓状に丘陵端が走るが、これは軟弱な洪積丘陵が海進によって浸食されたものである。このため丘陵と平野の比高が大きく、いかに当地の治水が常に農民の苦役を強いていたかは当地に残る説話にも明らかにされている。本遺跡の東を流れる糸田川、西を流れる高川、天竺川のいずれも河床が水田面より高い「天井川」となっており、その流路固定に並ならぬ努力があったのである。この蔵人遺跡は標高4mの水田面下にあり、中世遺構面は標高3m前後、古墳時代は2.5mを前後するようである。西方を流れる高川の沖積作用によって地盤はかなり高くなっており、また、西方に位置する垂水南遺跡より古墳時代の地表面は平均1.5mも高い。当地が高川の影響を大きく受けていたことは地形図上のみならず、中世面を前後する土層位や古墳時代下層の砂層によっても明らかである。

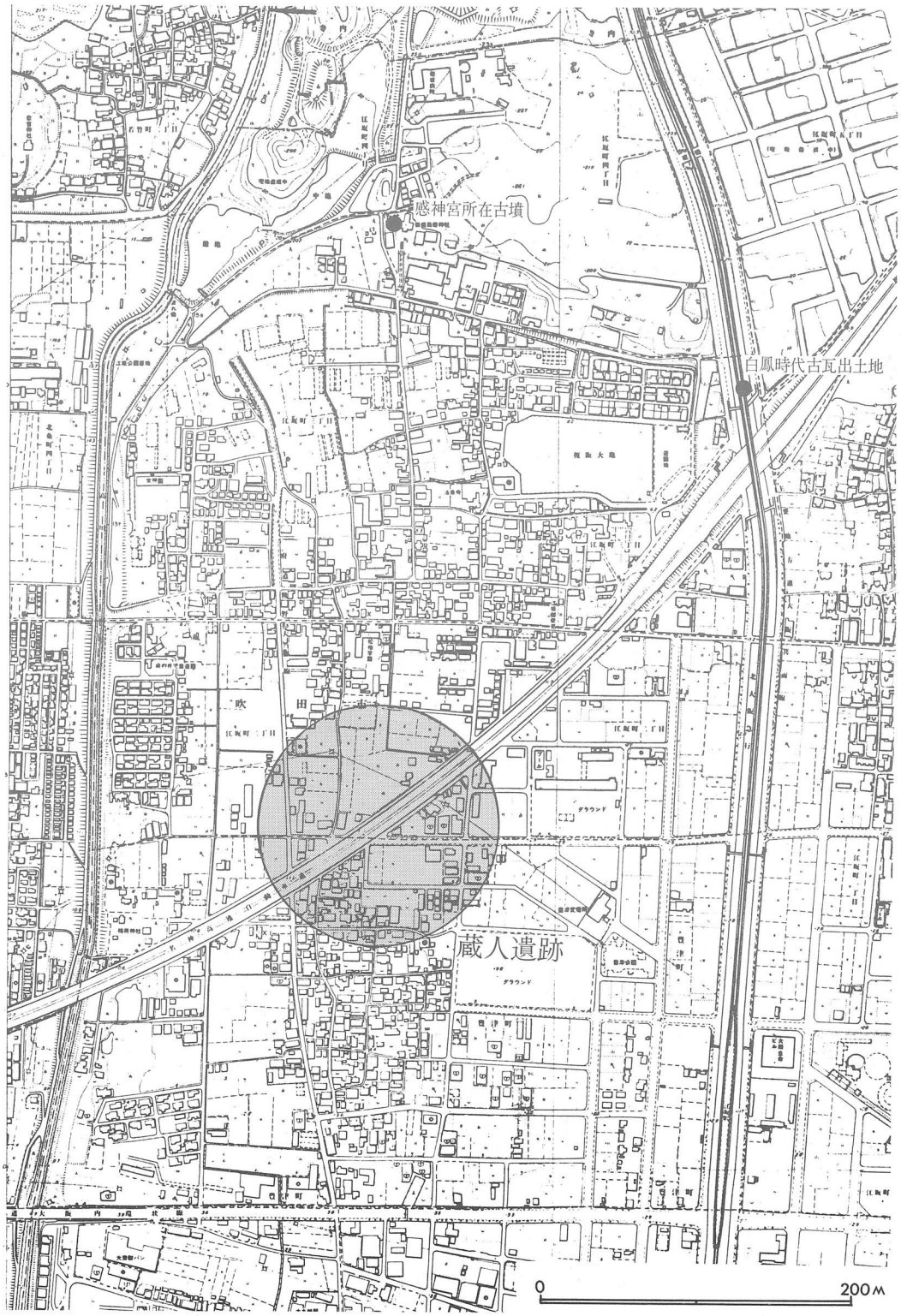
さて、「蔵人」とは令外の官の一つで、皇室文書や道具類を納める倉を管理をする役人であったが、810年(弘仁元年)蔵人所の設置以後は職掌は大巾に拡大され、天皇直属の重職として古代官制上に大きな位置をしめていたのである。

当地の地名「蔵人」がこの中央官司と関連するか、あるいは荘園経営に不可欠な「蔵」の管理に関係することに由来するのかは不明であるが、室町初期には成立[②]していた典型的な中世村落とし



1．桜塚古墳群
2．長興寺遺跡
3．銅鐸出土地
4．穂積遺跡
5．感神宮所在古墳
6．蔵人遺跡
7．垂水西原古墳
8．垂水遺跡
9．垂水南遺跡
10．五反島遺跡
11．須恵器窯跡群
12．片山公園遺跡
13．出口古墳
14．金田遺跡
15．都呂須遺跡

第1図　周辺遺跡分布図



第２図 蔵 人 遺 跡 位 置 図

て中世荘園史研究の上でも高く評価されている村落なのである。また蔵人村のみならず、垂水南遺跡をも含んで当地一帯は弘仁3年(812) 立庄の「東寺領垂水庄」としてみえるところで、古代社寺荘園としては本市でも最も早く文献にあらわれるところなのである。③

さて、考古学的遺跡をみると、蔵人遺跡を始めとする本市西端の遺跡群は、弥生、古墳、奈良、平安時代を経て中世に至るまで連続した遺跡群としてとらえることのできる地域である。その内容の豊富さと、近時の開発にともなう幾度かの調査の結果からも、今後とも大いに調査研究の進展が期待できる地域なのである。蔵人遺跡の北部はすぐ丘陵部となるが、北東は弥生中～後期の高地性集落として知られる垂水遺跡があり、西に至っては長興寺、原田遺跡、原田神社銅鐸出土地など弥生遺跡群が点在する。④古墳では、蔵人遺跡の東北方のピークに前期古墳とも考えられる垂水西原古墳があり、またずっと時期は下るが、すぐ北方の丘陵端には石棺を出土した古墳（感神宮所在古墳）がある。西方丘陵には豊中市域に古墳の展開をみるが、特にすぐ西方は中期古墳群として名高い桜塚古墳群⑤へと連続する。古墳の分布に呼応すべき平地遺跡群としては東方から金田遺跡、垂水南遺跡、そしてこの蔵人遺跡、とわずか1km内外の間隔をもって並び、さらに西方3kmに位置する利倉遺跡に至るまで布留式期を主体とする古墳時代集落址が点在するのである。⑥蔵人遺跡の南部はさらに、標高が下がり神崎川の流域に至るが、南吹田5丁目の五反島遺跡をはじめとして若干の遺跡もみとめられ、遺跡の展開は神崎川の対岸の東淀川区国次や、十八条町にまで及んでいる。⑦これらの遺跡は弥生後期から古墳時代までを含んでいる。これも古墳時代のものとしては布留式期のものが多い。いずれも全面的な調査を経た遺跡は少く、実体不詳なものも多いが、集落として必ずしも最適ではない低湿な地であるが、何回となく洪水の洗礼を受けながらも遺跡は存続しているのである。⑧

5世紀といえば、大阪平野に巨大古墳が構築された時期であり、以前にも増して政治的支配が確立された時期であるのは明らかである。河内平野への北部からの導入路としてこの神崎川流域は重視されていたと思われ、市の西部、この地に散在する遺跡群が重視されるわけである。

第3章　発掘調査の経過

発掘調査は、市教育委員会が主体となり、関西大学考古学研究室(当時)の藤原　学が担当し、下水道部検査係　塩見敬三・市教育委員会社会教育指導員　亀島重則等がこれに参加し、福本明ほか、関西大学考古学研究室の協力をうけ実施された。

工事の関係上、調査対象地区を、A～Fの5区に区分し、工事の進行に伴って、E、A・B、F、C・Dの4期にわたって行われた。調査の進行と、成果の概略は別表のとおりである。

なお、4－I区で検出した、6号近代井戸は、当初の調査対象区域外であったが、押管工法による下水管埋設中に、木製遺構が検出されたため、応急調査を実施したものである。

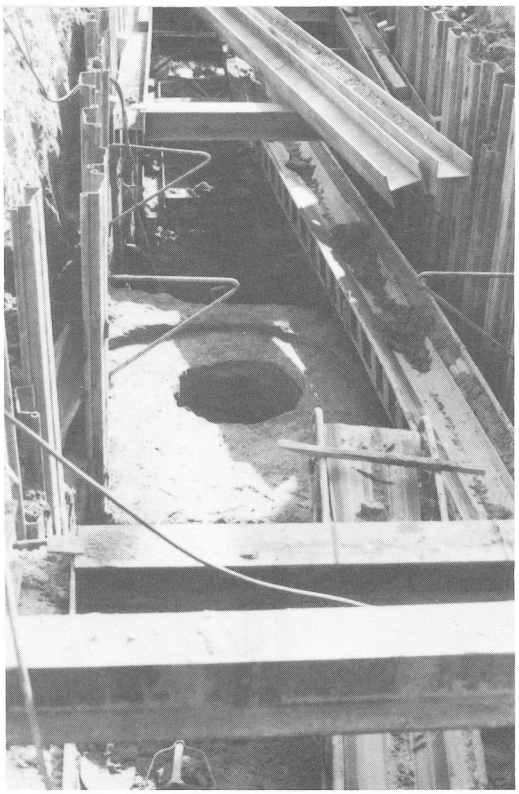
発掘調査は下水幹線工事という性格からして、通常の発掘調査の方法がとれず数々の困難な点が伴なった。

まず、巾2m、延長150m以上という限られた範囲内に限定されたため、遺構の性格や平面形態の把握には無理があったが、それにもかかわらず10基にも及ぶ井戸跡が検出されたことは、むしろ幸運であったかもしれない。井戸に付属すべく住居跡などの検出は今後の平面的な調査の機会に待たれよう。

さらに、工事の施工上、掘削に先立って矢板が間断なく打ち込まれ、その矢板を支えるため

次　数	調査期日	調査区	調　査　の　成　果
第1次	S52.11. 6 ～11.20	A･B区の1部 ･E区	1･2･3･5号中世期井戸の検出 中世水路の検出 古墳時代土器群の検出 現地説明会の実施
第2次	S52.12. 1 ～12. 9	B　　区	2･4号中世期井戸の検出 古墳時代須恵器大甕の検出
第3次	S53. 1.28 ～ 2. 3	F　　区	古墳時代木器群・土器の検出
第4次	S53. 2. 4 ～ 2.12	4－1区	6号近代井戸の検出 瓦・平瓦形瓦質井戸枠の検出 ガラス瓶・綿紡木管等の検出
		C・D区	7･8･9号中世期井戸、中世期石組溝の検出 古墳時代溝の検出 奈良時代溝の検出

付表1　発掘調査経過一覧



第3図　検出中の8号井戸

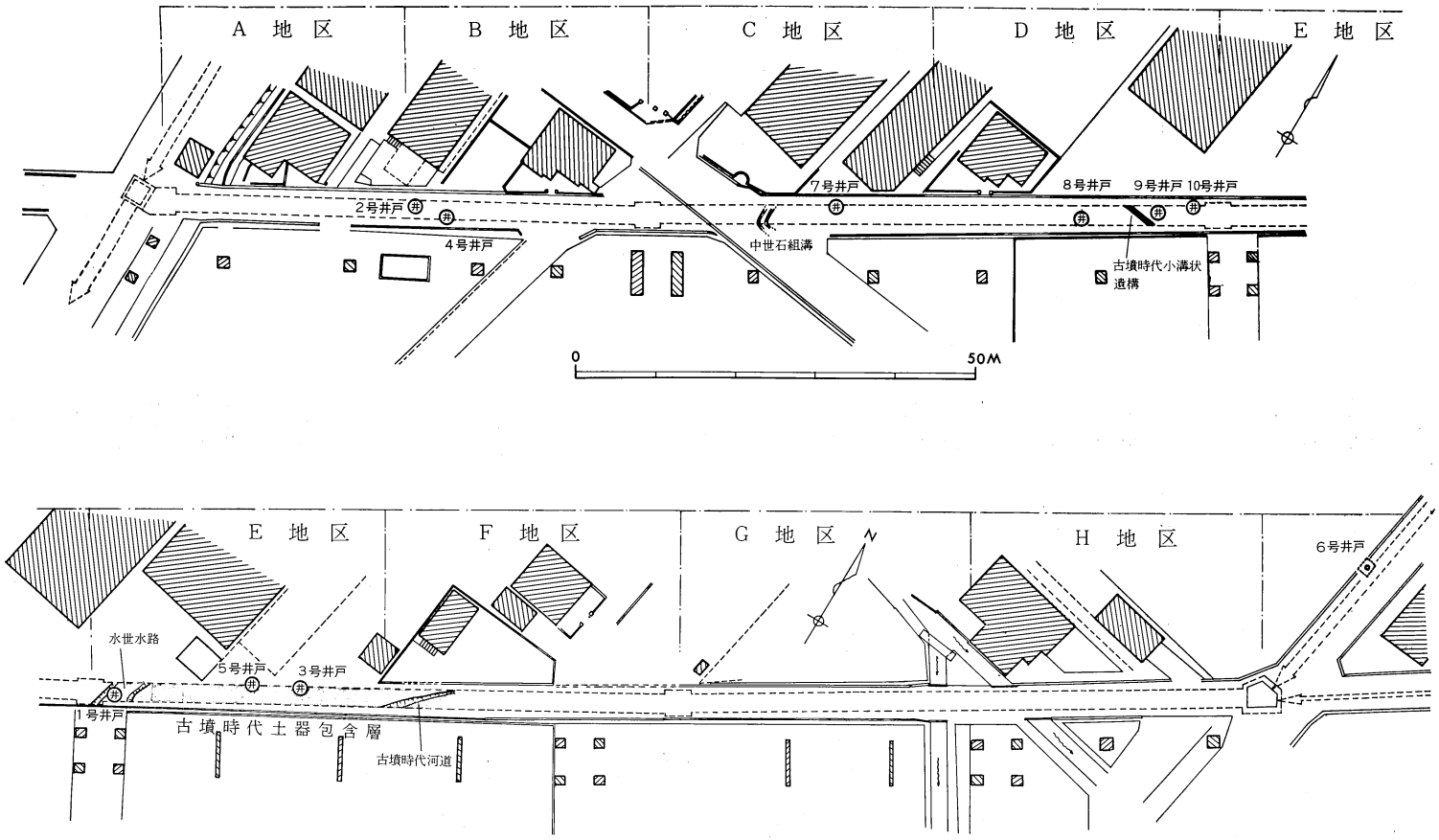
鋼材を地中梁として架構した。そのため土層断面が連続して残されない部分があり、断面観察が断片的になりがちであった。さらに、井戸跡や下層の古墳時代遺構面の検出にあたって湧水が多く、常時排水ポンプを駆動させても完全な排水が不可能で、作業が中断したこともしばしばであった。加うるに、工事区間の上部は作業車の通行のため鉄板をかけることにより採光が悪く、ランプによって調査を進めることもあった。

このような悪条件の中での調査を進めたのであるが次章以下で述べるごとく、蔵人遺跡の時代的な、あるいは性格的な概観は今回の調査で明らかにされ、少くとも150mの延長にわたって遺跡が存在することも明らかとなった。工事の進行にともなって延々と約4ヶ月間も調査が続いたのであるが、このような特殊な工法に伴う調査として最良のものではなくとも、今後のためにも大きな経験を得たのであった。そして、最大の成果は、わずか巾2mでも発掘調査の必要があることを証したことであったといえよう。

発掘調査は昭和53年2月12日、最後まで残っていたD地区が終了し、直ちに下水管の埋設が行われた。

昭和53年度においては、出土遺物の整理など内業調査が行われ、本報告書の刊行に至ったのである。

第4図　現地説明会風景



第5図 地区別図および遺構配置図

第4章　層　　序

先述したように、工法上の問題もあり、土層断面図の作成にも断絶があり、すべての層序を図化することができなかった。したがって、ここでは、最も長く土層序を観察したE区の土層を基本とし、それに遺構からの出土遺物との相互関係をかんがみて、できるかぎりの復元を行いたい。

まず、E区の基本的層序をみると次表のごとくである。

No.	土質・色調	層厚(概数:m)	時代	所見
Ⅰ	黒色土	0.15~0.2	現代	現水田面
Ⅱ	灰色土層	0.40	近世か？	
Ⅲ	白色砂層	0.20	中世後半か	
Ⅳ	暗灰色砂質土層	0.30	中世	
Ⅴ	暗灰色粘質土層	0.30	中世~古代？	上層に井戸群、水路面がある。
Ⅵ	黒色粘土層	0.15~0.25	古墳	Ⅵ—a、Ⅵ—bに2分、多量の土器をふくむ
Ⅶ	青灰色粘土層	0.15前後	古墳	土器は少ない。
Ⅷ	青灰色砂層		古墳~弥生？	灰色砂層、黒色粘土層も含む。

付表2　E地区基本土層序

層序をみると、東方1kmにある垂水南遺跡との類似点が多いが、中世の粘土層と古墳時代粘土層の間にⅣ、Ⅴ層の中世遺構面が存在することが本遺跡の特徴となっている。

Ⅲ層の白色砂層は、相当な洪水があったことを示す砂層で、河道様の状況を示す個所もあり、室町時代の遺物を稀に出土することから、中世後半の可能性を想定しているが、工事によって欠われた部分が多く断定的でないことをことわっておく。

Ⅳ層は中世期のもので、土層図でも明らかなように、中世水路を埋めており、その埋土に室町時代井戸が掘られており、その時期は明らかである。

Ⅴ層の暗灰色粘土層は硬質で安定したもので、ほとんどの調査区でみられる。良好な面をもち、かつ、瓦器椀の完形品をふくむ遺物の検出も目立っている。中世水路の掘られた面であり、1号井戸、3号井戸、4号井戸などの鎌倉時代井戸群の多くがこの上面から掘り込まれている。

Ⅴ層の層中には遺物がほとんど検出されていないため、形成された時期は不確定であるが、古代か、おそくとも古代末期と思われる。C区西端では、奈良時代の遺物のみを検出した河中砂層は、この層に相当すると思われ、奈良時代を一時期とすることは間違いなさそうである。

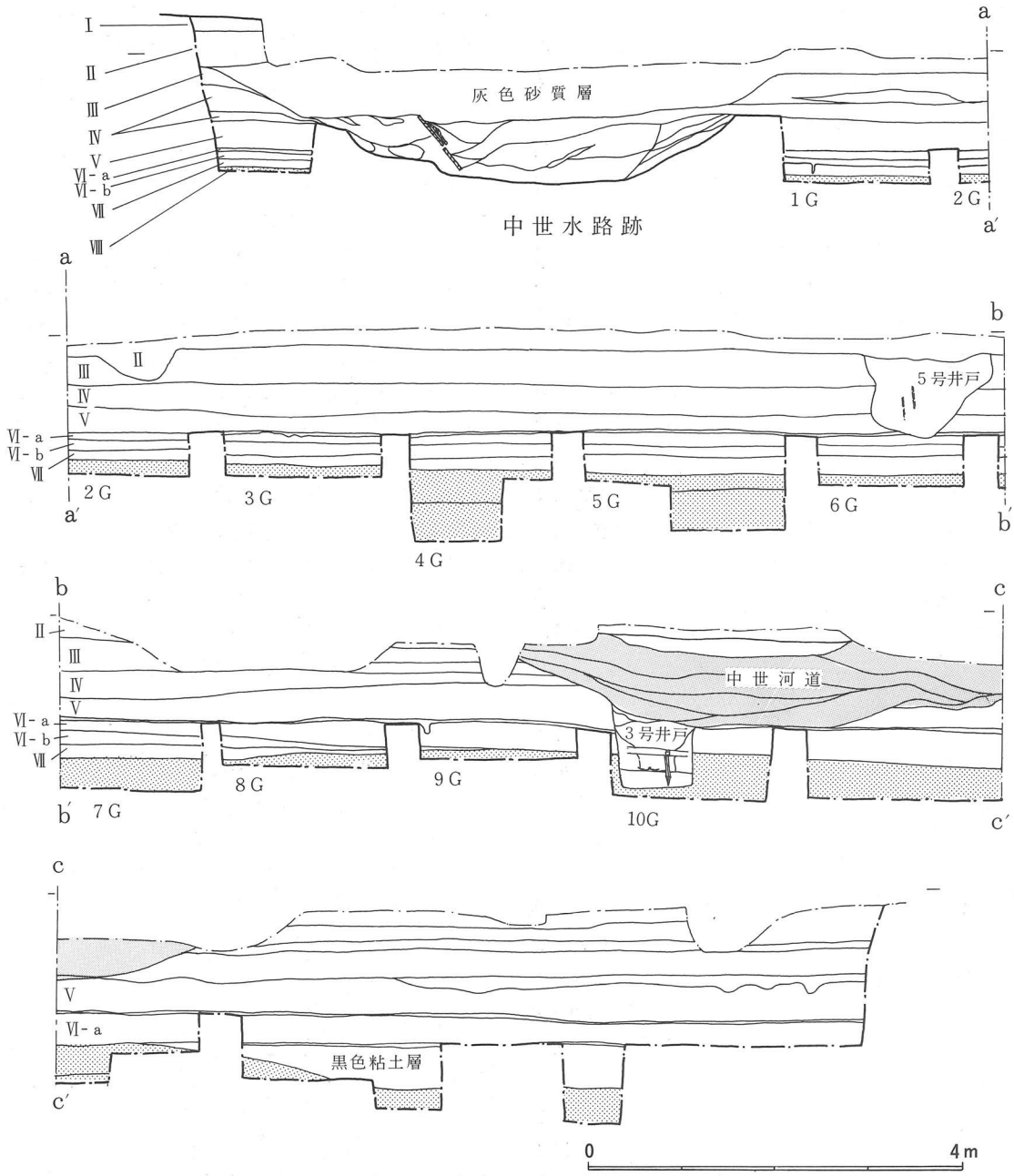
さて、この層以下が古墳時代の土器包含層である。Ⅵ層は黒色粘土層で、布留式土器を多量に包含する。Ⅵ層は上下2層に分けられ、上層(Ⅵ—a)は土器も細片が多く、古式須恵器をともなう。E区の東半分(G8から東側)からF区にかけては、砂層をかぶり、一時的にも滞水状況にあったようで、木器・木片が土器に伴って多く検出された。

Ⅵ層下層(Ⅵ—b)は、スミの混入が著しく、土器片も大きくなり、E区土器群1・2・4がこの層から検出された。

Ⅶ層は青灰色粘土層で、土器の出土量が少なくなるが、E区では土器群3のみが一括資料として、摘出することができた。布留式期をさかのぼるものである。

Ⅷ層は青灰色砂層(あるいは灰色砂層)となり、黒色粘土層と互層をなすこともあり、湧水が多く、弥生式土器を検出することもある。ただ、F地区東側では、これに相当する下層砂層から布留式土器をともなって、最古式の須恵器が検出された個所があり、この部分は上層からの激しい土砂流の貫入があったと考えられた。

このようにⅧ層はきわめて不安定なもので、遺構面の形成は望めるすべもなく、激しい出水によって北方(上方)から流されてきたようである。



第６図　Ｅ地区土層断面図

第５章　中世の遺構・遺物

１．中世遺構の展開

検出された中世遺構は井戸９、水路跡１、石組溝１であり、これら遺構内外に瓦器、土師質小皿、瓦質土器などの土器が検出された。

検出区は、B～E区にわたるが、なかでもC・D・E区に比較的集中しているようである。中世遺物も、この区間が多く、すぐ近隣に住居址などが遺存しているものとみられる。この井戸群と石組溝や水路跡との関連は、巾わずか２ｍという限られた調査のため不明としかいえない。

２．中世の井戸群

中世の井戸群は、昭和52年の秋に行われた試掘調査において検出され（２号井戸）、本調査にあたってさらに新たな検出が予想されていた。本調査では巾わずか２ｍという狭長い調査区にもかかわらず、確実なものとして10基の井戸（うち１基は近代のもの）が検出された。この他、遺構としてとらえられなかったが、明らかに井戸枠と考えられる土製品や、羽釜の転用井戸枠が出土しており、遺跡の存続期間中には相当な数の井戸が掘られたようである。

遺物のみでしか確認していないものは、のちの遺物の項で述べるとして本項では遺構の明白な１～10号井戸について述べることとする。

１号井戸

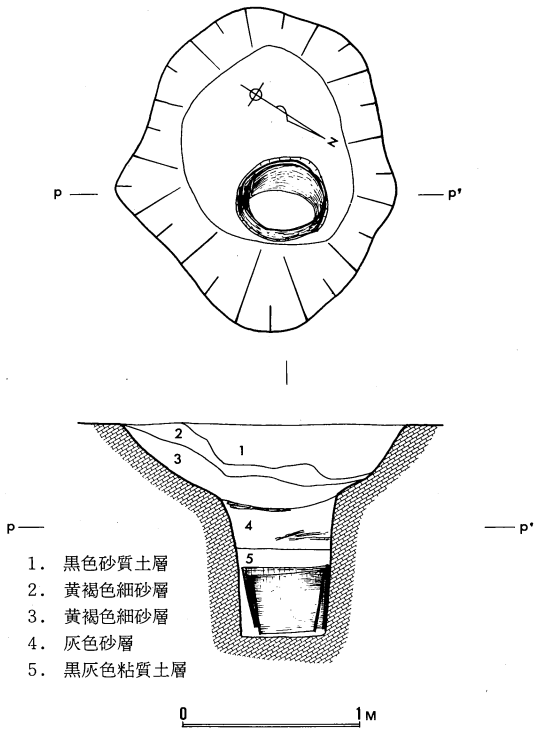
本調査で最初に検出された井戸である。E地区の西端において、暗灰色粘土層を1.6ｍ×1.85ｍのやや不整形な楕円形のスリ鉢様に掘りぬきその底部に直径68cm、深さ75cmの円筒形の井戸を掘り、曲物の井戸枠を設けた円形上下２段構造の井戸である。

上段の落ち込み検出中に、板材と杭を検出したが、これは中世河川の堰に使用された用材であったことがのちになって判明した。上段における井戸枠などの施設は不明である。

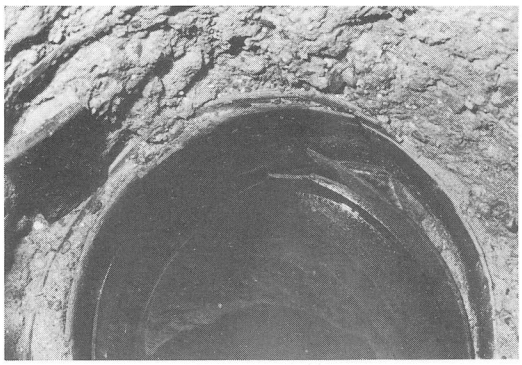
下段の下半は直径50cm正円に近い垂直の掘り方を呈し、この部分には井戸枠として桧物が使用されていた。この桧物は、桧の薄板の内側に切り込みを入れ、屈曲されたもので、通例「曲物」と呼ばれるものとは同一であるが、側板の結合に際しては結合穴や桜皮のような結束材はみられず、底板もなかった。したがって容器を転用したものではなく、本来から井戸枠として製作されたようである。垂直の円筒型の掘り方の側部には２～３本の竹材を編んだ箍の痕跡が各所にあり、これが薄板の結合に使われていたと考えられる。箍の痕跡が下段円筒部の上端から下まであり、また桧物が２重にずれ込んだように重なって遺存していたことから、桧物は上下２段に積み重ねて使用されていたようである。

井戸底は遺構上面より1.2ｍ下で、古墳時代最下層の青灰色砂層にまで達しており、この砂層から調査中においても刻々と涌き水がみられた。

井戸には作為的に埋納された遺物はみられず、



第７図　１号井戸実測図



(上) 第８図　１号井戸全景
(中) 第９図　　同 曲物井戸枠
(下) 第10図　　同 細部

上段推積土からは備前焼甕の小破片や、土師質土器細片が少量検出されたのみである。この備前焼は（間壁編年）⑨Ⅳ期に相当すると思われ、また鎌倉時代の水路の廃棄された後の堆積土に掘込まれていることから、概ね室町時代のものということができる。

２号井戸

Ｂ地区において検出された井戸で、試掘調査において所在が確認され、本調査実施の契機となった遺構である。一辺 1.3×1.35cmのやや不整形な方形の掘り方の上段に縦板、下段に桶を使用した方形縦板式２段構造の井戸である。

井戸枠として、巾30cm、厚さ３cmの杉板を各辺２枚ずつ使用して、一辺60cmの側壁とし、土圧によって側壁が内側へ倒れ込むことを防ぐため５cmの角材を四方にわたして壁を支えてあった。この角材は縦板の両側に貫穴を通して固定したほか、中央部では２個所を釘止めによりさらに強固に固定していた。縦板の上端は腐触によって失なわれており、この部分が地上に出ていたことが明らかである。

下段の円桶は桧の縦板11板を接合したもので、高さ38cm、直径は45～48cmあり、やや変形を被

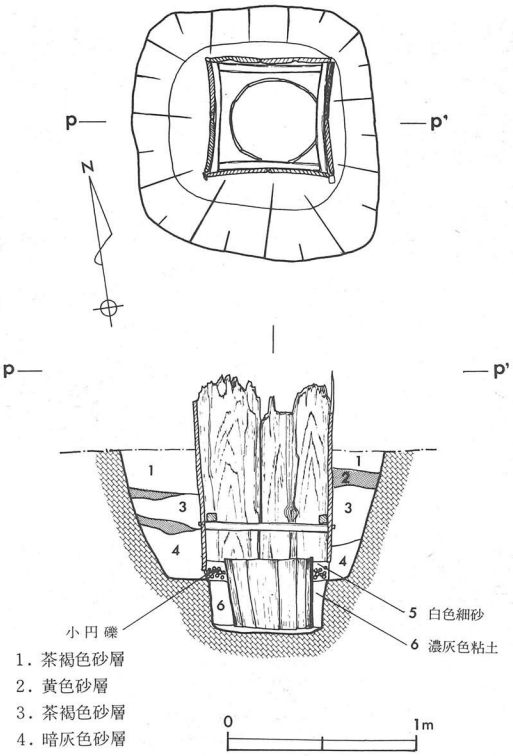
っている。

井戸の構造をみると、まず2段構造の掘り方を掘り、次に桶をすえ置き、桶の裏込めには濃灰色粘土と砂土の混合土をつめ、上方から縦板を設置したものである。

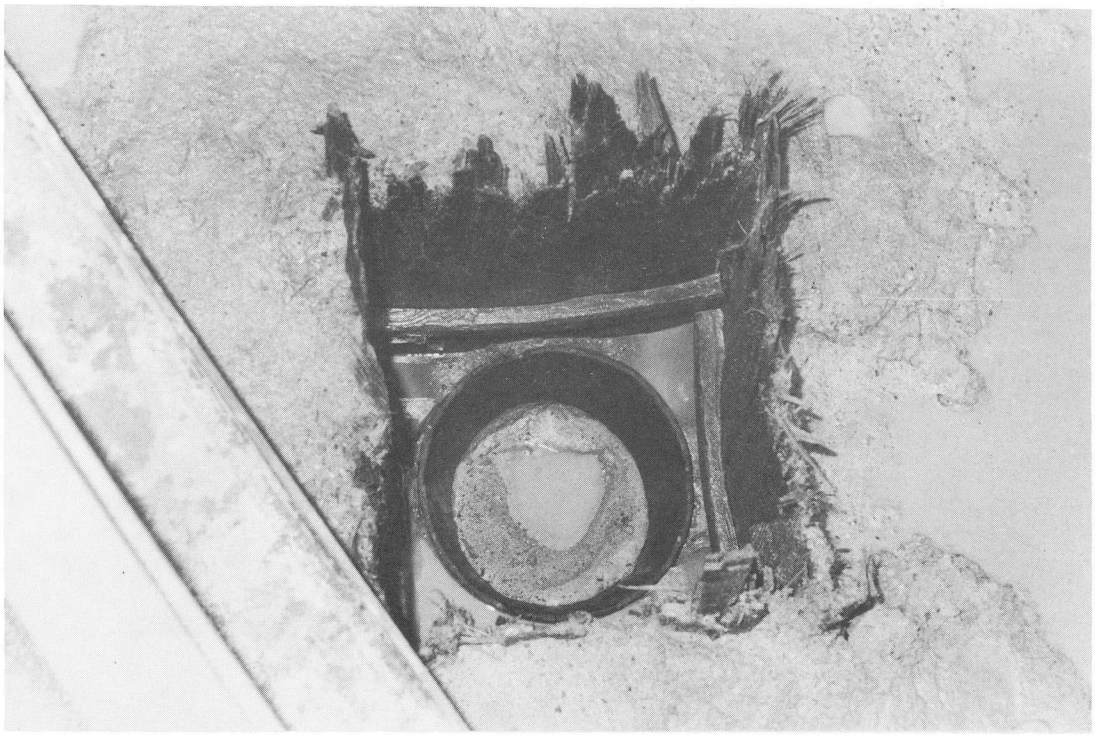
円桶と縦板の間には直径1～3㎝の玉石を一面に敷き、さらに白色細砂で覆っており、水を漉すようになっている。このような構造からみると、地下水は上段の縦板と下段の桶の間を通って細砂で漉され、浄水のみが円桶内に溜まるように工夫されていることがわかる。

さらに縦板の裏込め土より瓦器椀と土師質皿の細片が検出されており、井戸の掘られた時期、及び廃棄された時期は概ね鎌倉時代である。

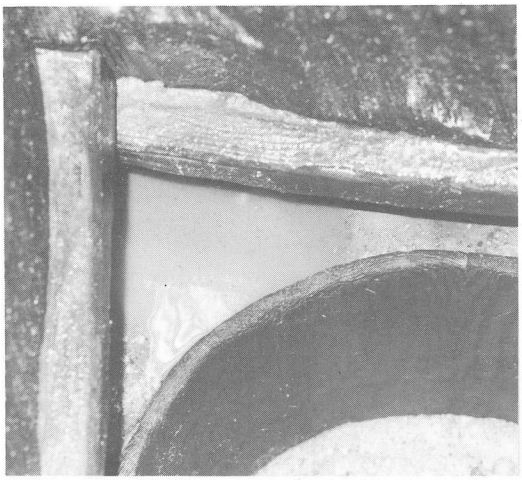
井戸内の献納土器はみられなかった。検出中で最も遺存の良好な井戸である。



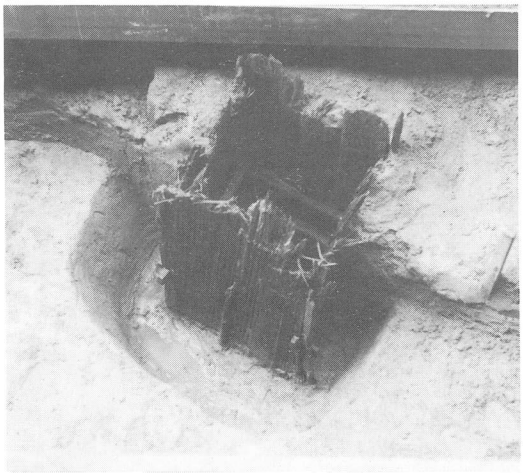
第11図　2号井戸実測図



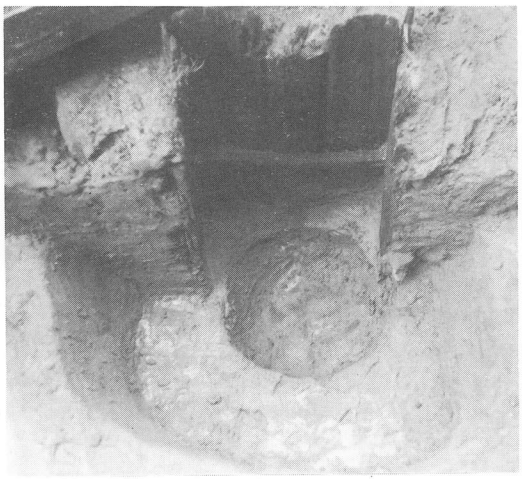
第12図　2号井戸全景



第13図　2号井戸内部



第14図　2号井戸縦板



第15図　解体中の井戸枠

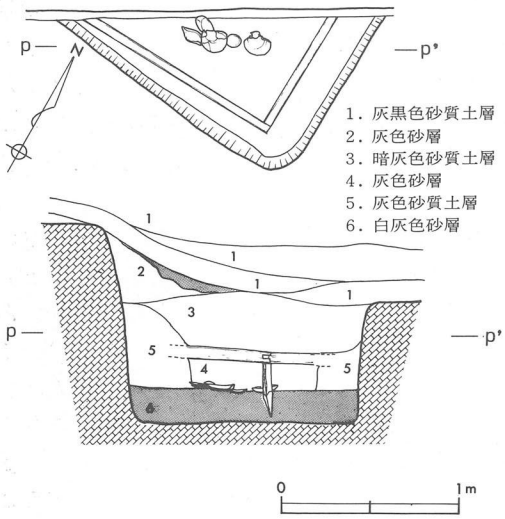
3号井戸

E地区の調査の最終段階で検出された井戸で、矢板の施行工事によって中央から切断されていたため全体の規模は不明であるが、一辺1m程度の方形の縦板式井戸であろう。

断面図で明らかなように、井戸は室町時代と考えられる瓦質土器を包含する河道によって、西から東へ向って削平されており、井戸の深さも不明である。西壁高が1m以上も垂直に立ち上がることから1段式の井戸であろうと考えられる。

井戸底部には縦板を固定したと思われる一辺6cmの角材が直角に組み合わせてあり、それを各辺のコーナーに長さ34cmの角杭で受け止めているものであった。

井戸底には厚さ20cmの白灰色砂層があり、その上には瓦器椀2点、土師質皿4点、石1点が検出された。出土状況からみると、井戸に投げ込まれたものでなく意図的に献納されたことが明らかである。今回の調査で検出された井戸の中で献納土器のみられた唯一の例である。井戸の形態としては4号井戸と類似したものである。



第16図　3号井戸実測図

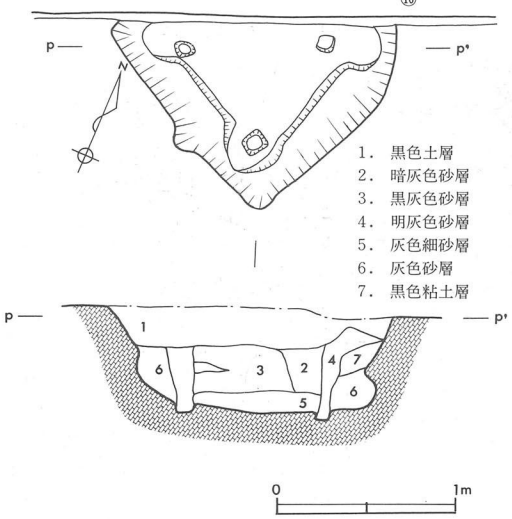
第17図　3 号 井 戸 検 出 状 況

4号井戸

B地区で2号井戸を検出したのに続いて中世遺構面を精査中、2号井戸の東北4mの地点で方形の掘り方がみとめられた。調査をすすめたところ、土拡側壁及び底部に板の痕跡や杭穴が検出され、また土層断面の所見などから井戸址と断定した。

掘り方は工事矢板のため半分強しか検出されなかったが、上端で一辺1.35mを測り、土拡側中央から各辺に沿って直線的に縦板の痕跡があった。その各支点に小杭穴が残されており、そのいずれも角形杭であったことが判明した。また、土層の断面観察によると、上から下の井戸底に至るまで明灰色砂層があり、杭が打ち込まれていたことが明らかであった。また井戸底に細砂層がレンズ状に推積し、井戸枠の内部にのみ常に滞水のあったことを示しており、これらの所見より本井戸は方形縦板式の井戸であり、角杭により方形縦板を受けていた第3号井戸の構造と全く同一のものであった可能性が高い。

井戸底には埋納土器はみられなかったが、井戸内堆積土より瓦器底部高台部分の細片を一点検出した。この瓦器片は、白石編年⑩の第Ⅱ期に



第18図　4号井戸実測図

含まれるもので、本遺跡検出の瓦器中においては最古の段階を示すものであった。

第19図　4号井戸（東より）

第20図　4号井戸（上方より）

5号井戸

E地区で検出されたもので、これも矢板施行の折にほぼ中央で切断されたらしく、E地区の西北壁の土層断面によって確認されたのみである。平面形や井戸の構造は上下2段構造のものではないことがわかるのみで、平面調査できなかったため詳細は不明である。

E地区の中央で、巾0.70m、深さ0.43mの袋状をなす落ち込みが検出され、土拡内には単一の灰色砂質土層が充満し、その中央では2本の細い竹筒が垂直に打込まれていることが明らかとなった。これが井戸の廃棄にともなう遺風と考えられることより、この袋状の土壙も井戸であることがほぼ確実となった。（第6図参照）

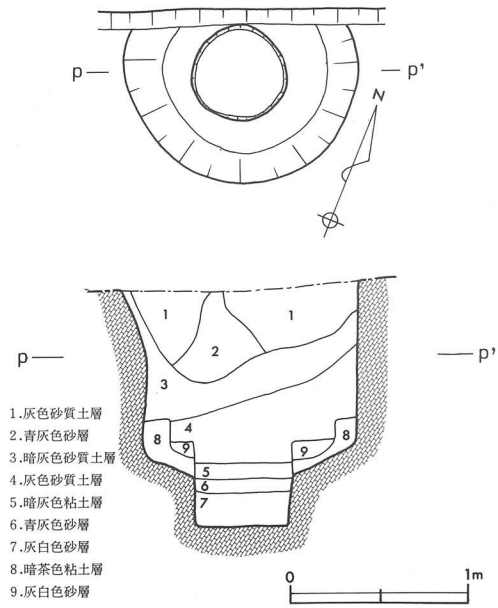
土壙内の堆積土は単一であり、井戸の廃棄にともなって人為的に埋め戻されたらしいことがわかった。遺物の検出は皆無であり、その時期は不明であるがかなり上層から掘り込まれており室町時代以降のものらしい。

7号井戸

上下2段構造の円形井戸であるが井戸枠は全く遺されておらず、平面形及び土層の観察のみにとどまった。

上段は直径1.2m、下段は0.54mの円形掘り方をもつ。上段と下段の井戸枠接点に灰白色砂層を置いて、湧水を漉すように工夫されている構造は方形と円形の差はあるものの、2号井戸と類似の構造をなしていることがわかる。上端は把握できなかったが、下段の井戸基底部まで1.35mを測る。下段の堆積土からみて、貯水部分に徐々に砂がたまり、浄水を汲み上げることができなくなった時点で井戸を廃棄し、一気に埋め戻したらしい。

遺物等は皆無であり、時期を明確にしえなかったが、かなり上位から掘り込まれていることからおそらく室町時代以降のものであろう。



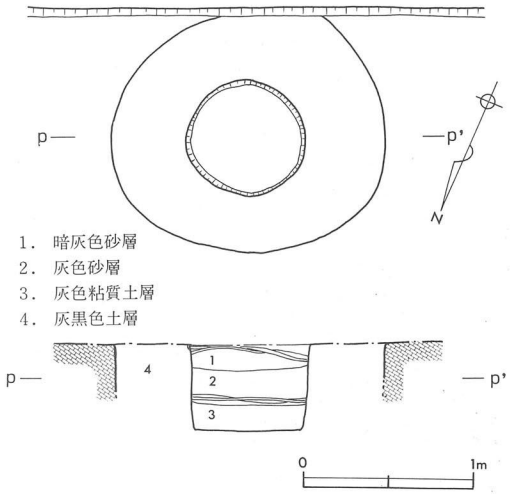
第21図　7号井戸実測図

第22図　7号井戸検出状況（西から）

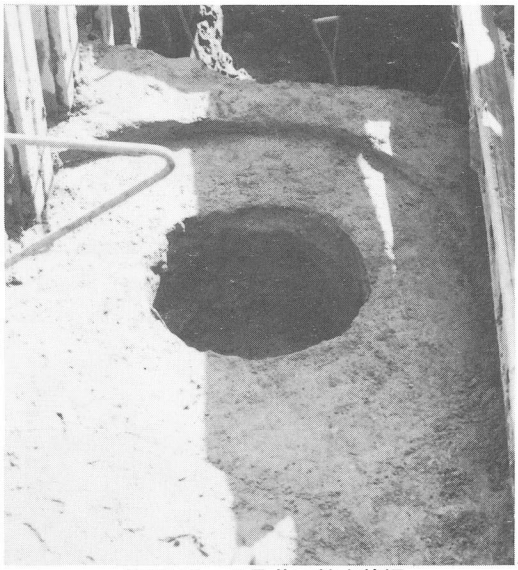
第23図　7号井戸検出状況（上より）

8号井戸

1.6m×1.45mのやや歪曲した円形掘り方をもつ井戸で、中央に0.68mの円形井筒があったらしく竹を編んだ箍が上下2段に遺されていた。井戸枠は検出されずすでに抜き取られたものといえる。外側の掘り方が井枠に比べて大きいことから上下2段構造をもつ円形井戸であったと思われる。基底部分の0.5mを検出したのみで、検出遺物もなく詳細は不明である。



第24図　8号井戸実測図

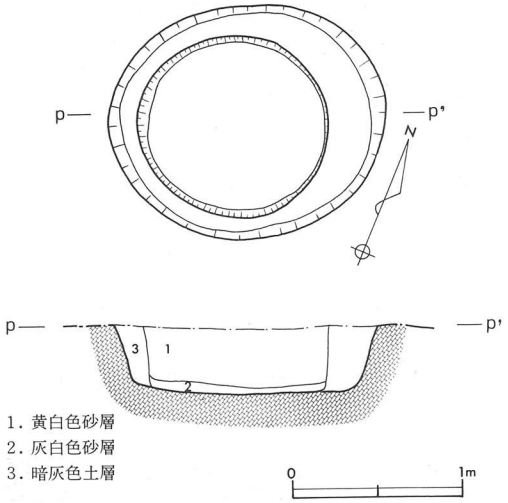


第25図　8号井戸検出状況

第26図　8号井戸竹筐細部

9号井戸

8号井戸の東北方9.5mの地点で、同様な状態で基底部のみ検出された。直径 1.6×1.45cmのやや楕円形の掘り方に、径1.1mの黄白色砂層が充満した部分があり、これが井戸枠の痕跡とみられる。遺材はみられなかった。



第27図　9号井戸実測図

第28図　9号井戸検出状況

10号井戸

9号井戸の東北5.5mの地点で検出された。鋼板矢板で切断されており、検出時点では平面調査が不可能な状況であった。断面調査を行うべく作業を進めていたところ、土層断面が崩壊し、調査は打切られた。土壁が崩壊した際、井戸内より完形瓦器椀（第37図－11）が検出された。

3．中世水路跡

E地区の最西端、第1号井戸の下から検出された巾2.9mの水路跡である。

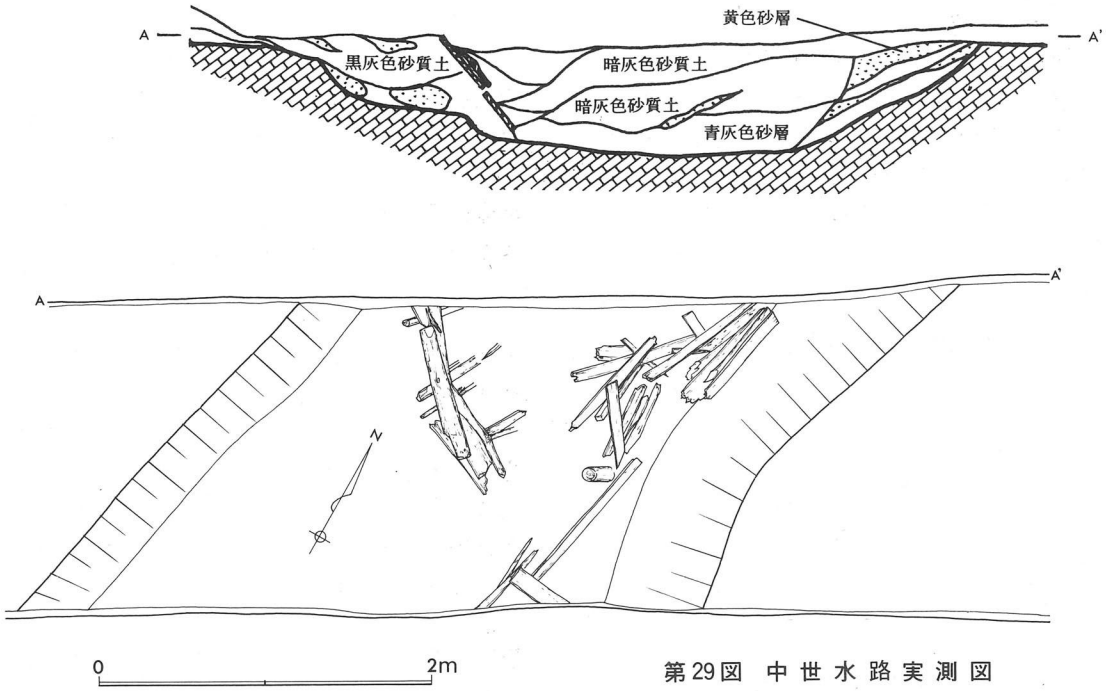
上端の最大巾6mの掘り方をもち、その両岸を杭と横板によって護岸を施したもので、実質的には巾2.9m、高さ1.6mの水路である。水路の方向はN－10°Eと磁北よりやや東へ振るが、北から南へと流れている。

土層断面によると、水路内は青灰色砂層（下層）と暗灰色砂質土（上層）とが黄色砂質層を間層にしながら流れているが、護岸のなされていた両岸は、黄色砂層と黒灰色土層を互層とする裏込め土があきらかに残されている。護岸材や杭は第29図で明らかなように、左岸には部分的に残されているが、右岸には遺材すらなく、土層断面によって護岸が施されていたことが確認された。

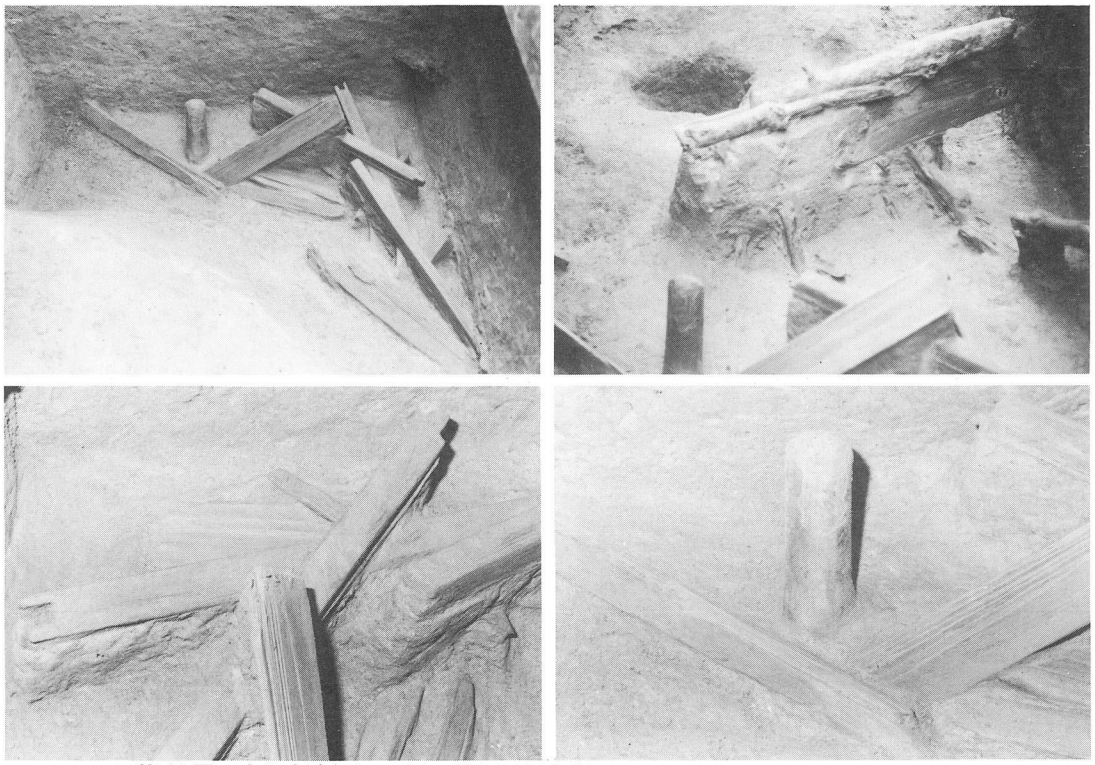
水路中央には、水流に対して杭列と横板が残されており、相当の変形を被っているものの水流調節をはたしていた堰が施されていたらしい。

左岸の護岸横板の遺材中に、3号井戸と全く同一の形態をもつ井戸枠が相当含まれており、また杉板も一方のみ著しく腐触の進んだ材が多く、これは方形縦板式井戸の縦材と考えればスムーズに解釈がつくわけである。

水路内堆積土より瓦器及び土師質小皿破片が若干検出されたほか、護岸材裏込め土中よりも同様な遺物が出土しており、水路の掘られた時期は鎌倉時代であり、この時代を通じて水路が生かされていたことがわかる。水路が埋没したのち、室町時代には1号井戸が掘られており、この頃には水路としての用をなしていなかったといえよう。



第29図　中世水路実測図



第30図　中世水路細部　左上は護岸用材遺存状況、右上は堰の状況
左下は井戸枠を転用したもの、右下は杭、及び井戸縦板の転用材

4．石組溝

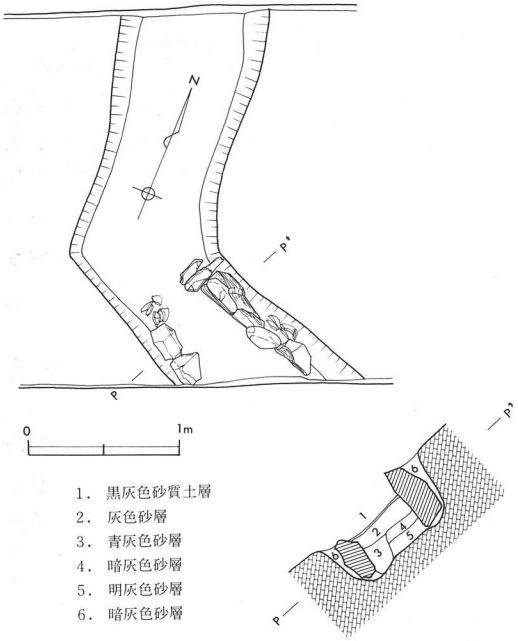
C地区の矢板打込み工事中に、東南側の矢板が石のような構造物に当たり矢板が入らなくなったので、この部分のみを横板によって施行し、調査を行った。その結果、北西に向う石列が2列あり、側壁に石を使用した石溝であることが判明した。この石列を北側に追求したが、石の大半は抜き取られその溝の掘り方のみしか調査できなかった。

溝は巾40cm、深さ46cmあり、両側壁の裏込めには暗灰色砂層を使い、さらには平瓦、丸瓦なども石の代用として側壁や裏込めに使用されていた。このうち検出瓦には、唐草文様をもつ平瓦の瓦当が一点（14）含まれていた。

溝は北へ向って大きく屈曲していることがわかったが、わずか巾２ｍの調査部分では直角に屈するかどうかも不明であるが、調査地点ではむしろ鈍角に曲がるようである。

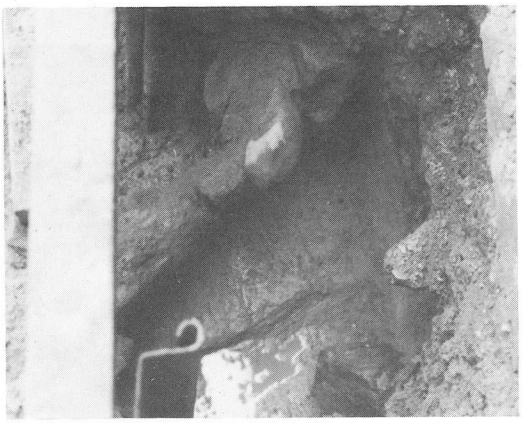
溝内より顕著な遺物はないが、側壁に使用された瓦は概ね室町時代に属するものであり、この溝の時期もそれに比定することができる。

また瓦以外では瓦質羽釜片が１点出土した。

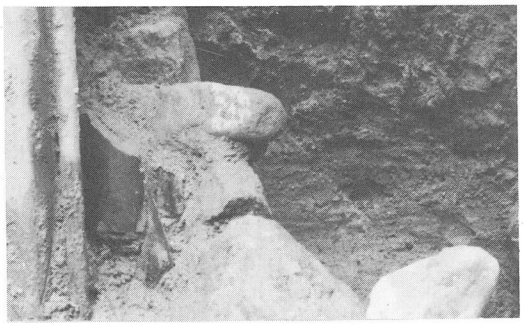


第31図　石組溝実測図

第32図　石組溝検出状況



第33図　検出された石組（上より）



第34図　瓦の検出状況

5．検出された中世遺物

各層より検出された遺物は、瓦器椀・土師質皿・擂鉢が最も多く、土師質羽釜・瓦質羽釜などの煮沸土器や、やや特殊なものとして瓦質火鉢・青磁・石組溝に転用された瓦・瓦質井戸枠がある。いずれも中世期全般を通じてみられるが、総じていえば瓦器・備前焼・瓦の編年観から、鎌倉時代から室町前半期のものが多いといえる。

出土状態からすると、中世井戸が9基も検出されたにもかかわらず、井戸内献納土器のみられたのは3号井戸のみであり、ここから完形の瓦器・土師質皿が検出された。他は井戸内埋土・中世水路内埋土に混入していたり、中世基盤層と考えられるⅤ層上から遺構を伴なわないで検出されたものが多く、概して細片である。

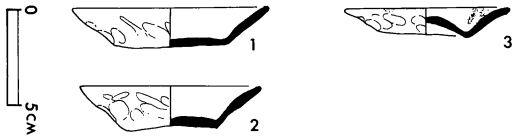
1号井戸出土遺物

1号井戸は献納土器はみられず、かつ埋土中にも顕著な遺物もなく、土師質小皿細片と備前焼甕破片若干が検出されたにすぎない。

このうち備前焼の破片は、酸化焔焼成のすすんだ明るい赤褐色を呈し、概ね室町時代にまで下るものである。

2号井戸出土遺物

井戸枠の遺存が最も良好で、井戸底より献納土器の出土が期待されたが、遂に一点の土器も検出することができなかった。ただ、井戸の検出に際して埋土内より（白石氏編年）Ⅲ段階と考えられる瓦器と土師質小皿の細片を検出しており、本井戸の時期は、概ね鎌倉時代ということができる。さらに土師質小皿は少数ながら中世水路出土の土師器と類似点が多く、ほとんど同時期のものと考えられる。



第35図　2号井戸検出小皿実測図

3号井戸出土遺物

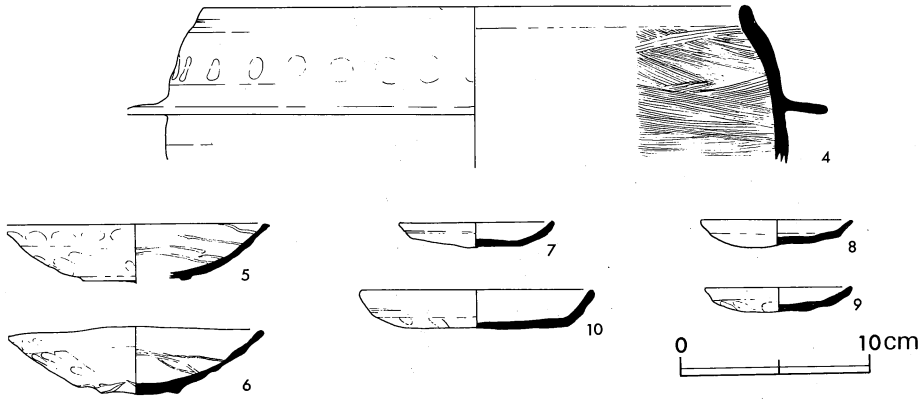
井戸底の献納土器として、瓦器椀2・土師質皿4があった。他に石1個が検出されたが、投入されたものかとも考えられる。

(4)は大型の土師質羽釜破片であるが、献納土器ではなく、井戸内埋土に混入していたものである。井戸廃絶期のものと考えられる。

瓦器椀は高台が痕跡程度となり、器高指数が低くなって皿型化を呈する段階といえ、白石編年によるⅢ－2型式に近いといえる。鎌倉期後半[10]に位置づけられる。

4号井戸出土遺物

井戸内埋土中より瓦器椀底部の高台部分の破片1点が検出されたのみである。しっかりとした高台が付けられており、本遺跡出土瓦器中では最も古相を呈する瓦器で、白石編年試表[10]の第Ⅱ段階のいずれかの型式であろうと考えられる。鎌倉時代前半に相当する。



第36図　3号井戸出土土器実測図（5～9は基底部献納土器）

番号	器　種	法　量	個々の特徴	出土位置・層位	色　調	胎　土
4	土師質羽釜	口　径：29.2cm 最大径：37.8cm	口縁は、ゆるやかに内傾して立ち上がるが、口縁で上へ軽くつまみ上げたもの。内面の上半は刷毛ナナメナデ。中位以下は刷毛ヨコナデ。鍔は薄手である。	E地区 3号井戸廃絶期 (埋土)	茶灰色	砂粒多し
5	瓦器椀	口　径：14.0cm 器　高：3.1cm 〈器高指数 4.5〉	口縁外面に軽いヨコナデ痕があるが、全面に押圧痕がのこる内面は粗い銀光ヘラミガキ、高台は低く退化著るしい。	E地区 3号井戸基底部 献納土器	灰黒色 一部灰白色	
6	瓦器椀	口　径：13.5cm 器　高：3.6cm 〈器高指数 3.8〉	口縁外面に軽いヨコナデ、押圧痕多い。高台は全周を回るものではなく、椀底部より高位にあり、痕跡化している。内面は粗いヘラミガキ。	3号井戸基底部 献納土器	黒色 一部灰白色	
7～9	土師質小皿	口径：7.7～8.4cm 器高：1.3～1.5cm	外面口縁への屈曲部に稜線がのこる。底部は平型で押圧調整。	3号井戸基底部 献納土器	淡い黄白色	
10	小師質皿	口　径：12.4cm 器　高：2.1cm	平底平担で、口縁は直線的に立ち上がる。内面～外側部は刷毛ヨコナデ、底部外面は押圧未調整。	3号井戸基底部 献納土器	淡い茶褐色	

付表3　3号井戸出土土器一覧表

10号井戸出土遺物

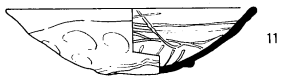
本井戸は土層断面で記録されたのみであるが調査中に崩壊し、その際井戸内埋土から瓦器椀(11)が完形で出土した。高台は、底部に斜めに付され、高台としての用をなしていないほど形骸化している。黒色煤化部分も口縁部のみで、他は灰白色を呈する。口径13.2cm、器高 3.5cm、内面の外周部に同心円篦磨き、中央に縦篦磨き暗文をのこす。白石編年の[10]Ⅲ－2段階のものである。鎌倉時代後半とされている。

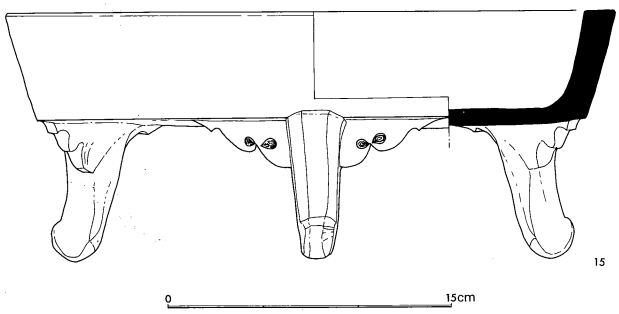
石組み溝の出土遺物

石組みに使用されていた瓦は、平瓦・丸瓦があり、また瓦当をもつ軒平瓦片が1点のみみられた。このうち石組み西壁に使用されていた丸瓦(12)、及び東壁に使用されていた丸瓦(13)、さらに、溝内に落ち込んでいた軒平瓦破片(14)を実測し、図示した。溝内より瓦器などの土器は検出されていない。

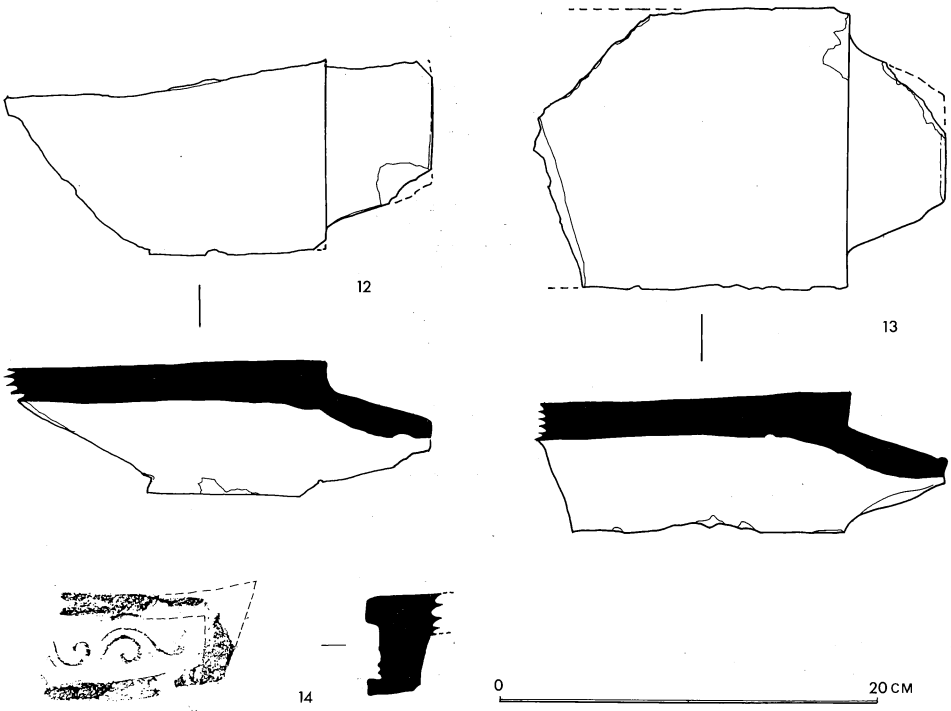
(12)・(13)は玉縁付丸瓦で、玉縁高は各々 5.6、5.0cmで、ほとんど同一手法によりつくられている。外面は縄目文による叩きを磨り削した跡があり、内面には細かい布目がのこる。両者、特に(13)は黒色煤化がすすみ、硬質に焼き上がっている。瓦の側部に打ち欠いた痕があり、この瓦は当初、屋根に葺かれていたものが、のちこの石組みの裏込めに転用されたものと考えることができる。

(14)は唐草文を有する軒平瓦で、断片のため全体はわからないが、外縁の高いもの。





第37図　10号井戸検出瓦器及び中世河道検出の瓦質火鉢実測図

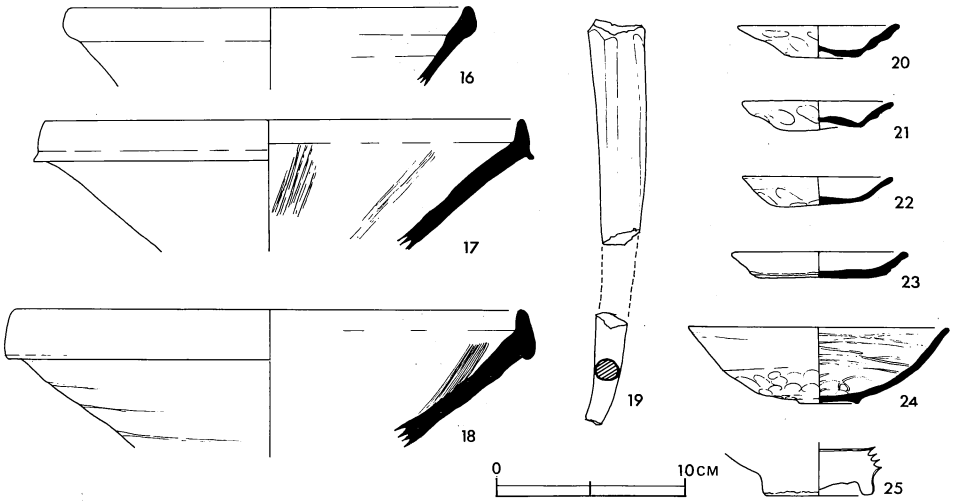


第38図　石組溝検出瓦実測図

その他

中世基盤層と考えられるⅤ層上から検出された遺物、あるいは上方からの河道にともなって流れ込んだものなどがあるが、遺構に伴なったものではなく、さらに工事の関係上、層序の不明なものはここに一括した。

瓦器椀は、ほとんどが白石編年⑩のⅢ段階を示すものであり、羽釜は、稲垣編年⑪の2期から6期までの多様なものを含んでいる。このうち形態的に下降するにしたがって、瓦質羽釜が圧倒的になってくるようである。羽釜は底部が薄くつくられており、完形で出土することはほとん



第39図　中世土器実測図

どないが、比較的依存の良好な(26)や(28)は、いずれも当初から底部は欠損していたと思わる。特に(26)については、鍔の全周をすべて作為的に打ち欠かれており、明らかに井戸枠として使用されていたものである。

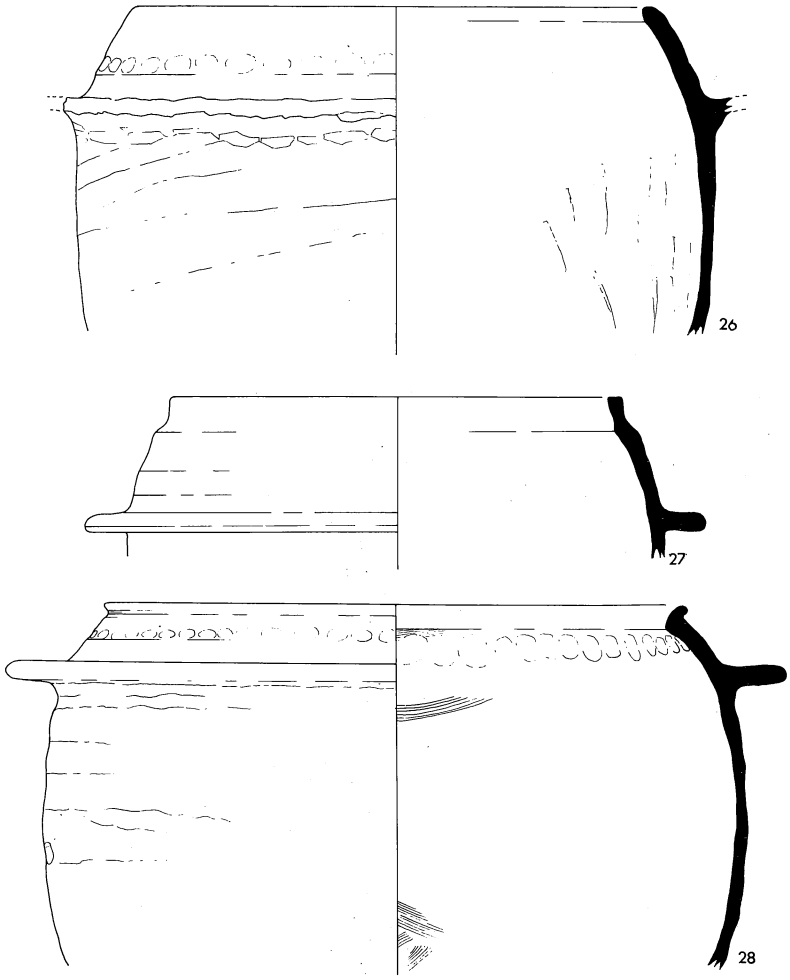
(17)・(18)は備前焼である。備前焼は概して検出量は少ないが、Ⅳ期のものが多く、Ⅳ—a・bの両期を含んでいる。

〈E地区〉

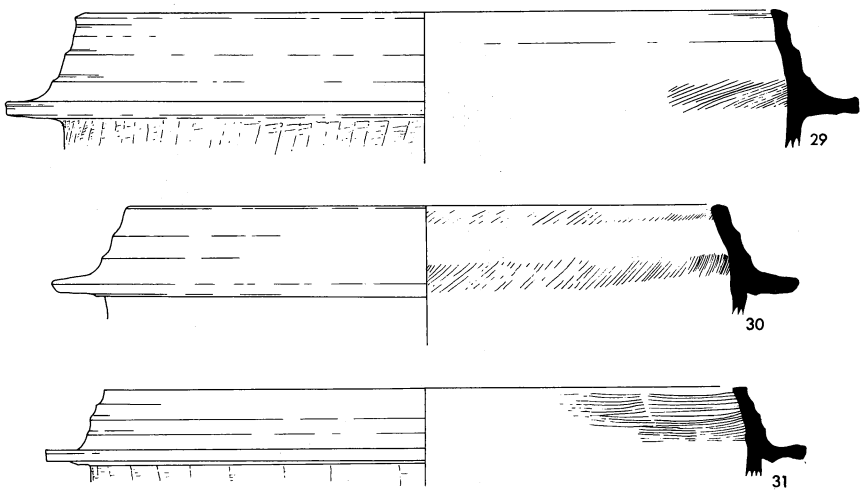
付表4　E地区出土土器一覧表

番号	器種	法量	個々の特徴	出土位置・層位	色調	胎土
15	瓦質火鉢	縁径：32.4cm 器高：13.0cm (復元)	破片であるが脚部1が完存、三脚と思われる。縁厚が大きく火鉢であろう。硬質の瓦質土器で、外面調整、焼成とも良好。脚部の装飾といい、優品である。	E地区 3号井戸廃絶後河道内埋土	黒漆色 器肉は白灰色	精良
16	擂鉢	口径：21.4cm	硬質で須恵質に焼け上がった擂鉢、櫛目なし、内外面ともヨコナデ調整。	D地区 中世包含層	灰色	
17	備前焼擂体	口径：23.8cm	口縁部を垂直につまみあげ、口唇部下端を強く下へ引き出したもの。内面には9条一帯の櫛目が施されている。	中世包含層	暗赤褐色	
18	備前焼擂鉢	口径：27.2cm	やや大型の擂鉢。口径がさらに大きいと思われるが、細片のため不詳。口縁の立ち上がりも大きく、またにぶい、櫛目はみとめられるが詳しくは不明。	中世含包層	灰色 器肉は赤褐色	
19	瓦質土鍋脚部		脚部細片のため、土鍋本体の形状は不明。支脚上半は部分的に銀光する瓦質。外面には、細かいタテ刷毛目の調整痕がのこされている。	E地区 中世包含層	黒色～灰色 器肉は灰白色	
20·21	土師質小皿	口径：8.1～8.6cm 器高：1.5～1.7cm	上げ底の小皿。外面には押圧痕が多い。口端は器厚大。灯芯の痕跡はみられない。	中世包含層	黄灰色	砂粒なく精良
22	小師質小皿	口径：8.0cm 器高：1.5cm	平底。口縁部のみヨコナデ調整。他は押圧調整、指紋が多くのこる。	中世包含層	黄灰色	水篩された精良な粘土
23	瓦質小皿	口径：8.8cm 器高：1.4cm	平底の浅い小皿。瓦質ではあるが、焼成があまく、黒色煤化も不充分。	Ⅵ層	灰色 器肉は灰白色	
24	瓦器椀	口径：14.0cm	口縁端には凹線などはみられない。外面は上半をヨコナデ、下半は押圧調整。内面には、全面に粗いヘラミガキが施され、中央部はラセン状ヘラミガキ。高台は低く小さく、断面三角形を呈する。焼成良好。	C地区 Ⅴ層直上	暗灰色 器肉は白灰色	精良
25	青磁椀	高台径：6.0cm	明磁椀であろう。厚づくりな削り出し高台をもつ。釉調は淡い緑色を呈し、微細な貫入がある。	E地区 河道内	淡緑色	白色砂多い
26	土師質羽釜	口径：27.0cm	口縁が内傾しつつ直線的に立ちあがる。鍔の部分は全て打ち欠いてあり、井戸枠転用材である。体部下半は全面に煤化しており、当初は煮沸器としても使用されていた。	Ⅴ層直上		
27	土師質羽釜	口径：24.0cm 最大径：33.4cm	口縁は内傾して直線的に立ち上がり、口端に至って大きくつまみ上げ、口端面をつくる。全体を細かい刷毛ヨコナデによって仕上げている。調整はよい。体部下半黒色煤化。	F地区	茶灰色	砂粒多い

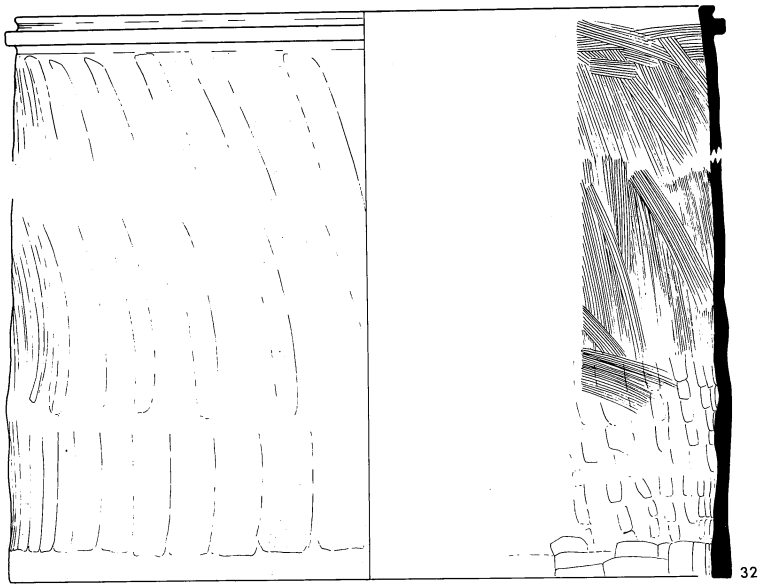
28	土師質羽釜	口　径：31.0cm 最大径：42.2cm	口縁は大きく内傾しつつ立ち上がり、口端で大きく反転する。口端面はつくらない。各所に押圧調整痕をのこすが、ナデを主体とした仕上げをしている。内部には弱い刷毛目がある。体部下端には黒色煤化部分がのこる。下底部がライン状に欠損しており、井戸転用材として使用されたようである。	C地区	赤化した黄灰色	
29	瓦質羽釜	口　径：36.4cm 最大径：45.0cm	口端面をシャープに引き出し、口縁に2段の稜をつけたもの。鍔もシャープで回転を充分に利用した成形を行っている。体部はヨコヘラケズリ仕上げ、内面はナナメ刷毛ナデののち、ヨコナデ調整。	E地区	暗灰色瓦質	砂が多い
30	瓦質羽釜	口　径：31.2cm 最大径：40.2cm	成形技法は26と同一。仕上げ調整においてはシャープさがやや劣る。硬質。		灰色瓦質	
31	瓦質羽釜	口　径：34.8cm 最大径：40.8cm	26、27に比べてやや小型のもの。口縁外面の稜線は3段施されている。	B地区	灰黒色瓦質 器肉は灰白色	



第40図　土師質羽釜実測図



第41図　出土瓦質羽釜実測図

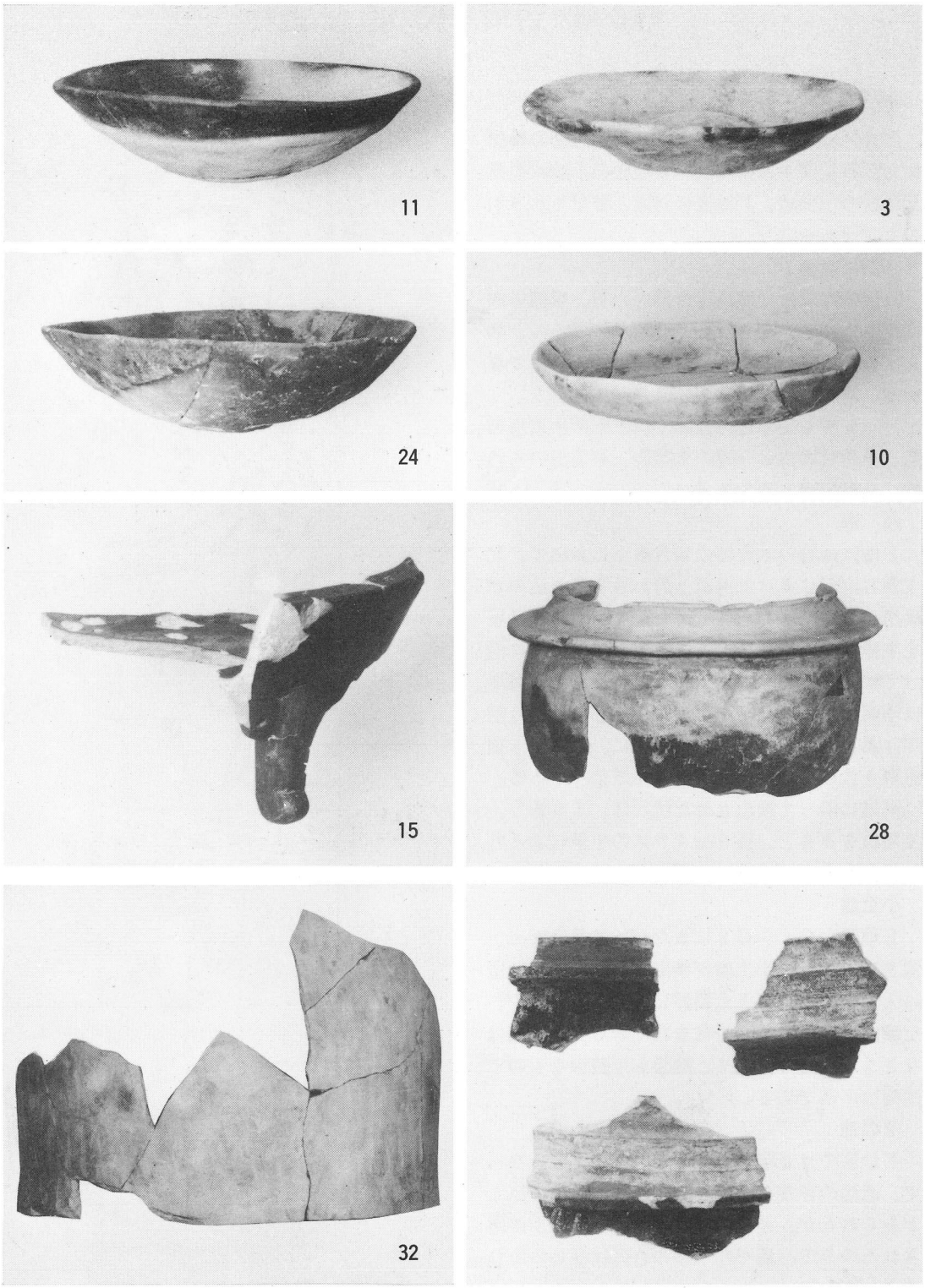


第42図　瓦質井戸枠実測図

(32)は瓦質の大型井戸枠である。直径57cm、高さは45.5cm前後。上端に高さ0.8cm、巾1.2cmの１条のタガを付け、上段の同型井戸枠を受止めるようになっている。外面は縦ナデによって調整し、内面は刷毛と縦ナデを併用する。焼成は瓦質ではあるが、軟質で黒色煤化部は一部に限られている。ＢからＣ区へ工事工区変更の際に出土し、層序は不明であるが、室町時代のものと推定している。

形状から判断すると、数段に積み重ねて使用されていたはずであるが、破片を接合して復元した限りでは、１個体のみしか検出されていない。今回の資料が原位置で出土したのであれば、１個体で使用されていたといえる。

内面の刷毛目調整や、下端のヘラケズリ調整などに、(29)～(31)の瓦質羽釜と共通する手法がみられ、これらと同時代のものと推定する根拠となっている。土鍋、羽釜、火鉢などの瓦質土器が多用されるなかで、このように井戸枠にまで用途が拡大されているのである。



第43図　出土中世土器

第６章　古墳時代の遺構・遺物

１．古墳時代の遺構

調査区域が限定されていたため、遺構の検出にも困難な面があったが、Ｄ地区の小溝状遺構、Ｅ地区の小土壙、Ｆ地区の河道と推定されるものなどがある。

小溝状遺構

Ｄ区の東よりで検出されたもので、東西方向に走る巾65cm、深さ23cmの溝状遺構であり、調査区の外に続いている。その性格は明らかでないが、構内より須恵器杯(208)が検出された。

Ⅵ－ａ層を切り込んでおり、また検出須恵器も、本遺跡検出の一連の土器群より後出のもので、６世紀のものである。

河　道

Ｆ地区西端の木片等の包含層下において、北東から南西にかけて河道と思われる落ち込みが検出された。浅い角度で落ち込むもので、砂層を主体とした堆積土であること、落ち込みに沿って杭列があることより、河道跡とした。対岸は不明である。検出状況から、上部はかなり削平され、そののち、多数の木片に、土師器・須恵器を含むⅥ－ａ層が流れ込んだようである。

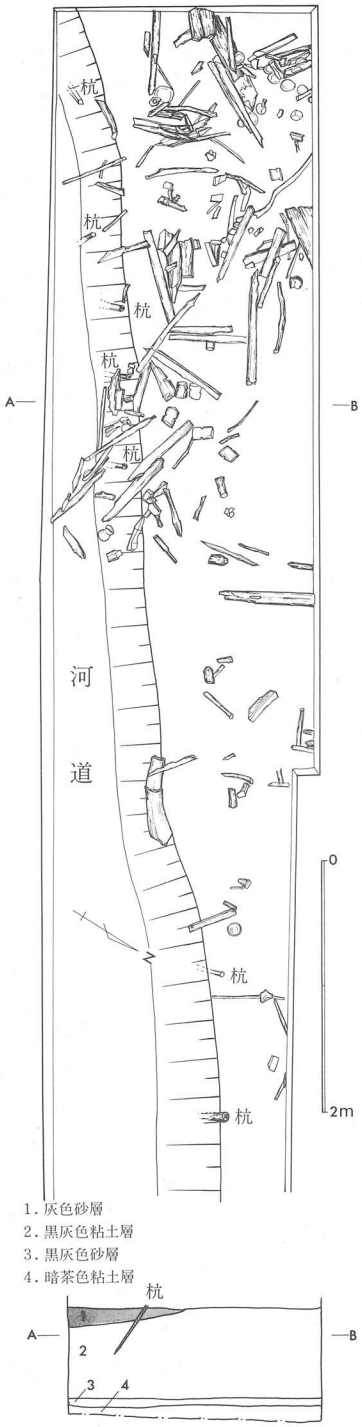
河道に沿って検出された杭列は、７本あり、使用材をみると、径８cmクラスの手斧による外面調整痕をもつ杭や、角杭なども認められた。

小土壙

Ｅ地区のＧ１～Ｇ２にまたがって長径76cm、深さ12cmを測る小土壙が検出された。南側は壁に入っている。第３土器群に近接しているが、土壙内には遺物は全く含まれておらず、関連はなさそうである。浅く、形態も不整形なもので、性格は不明である。

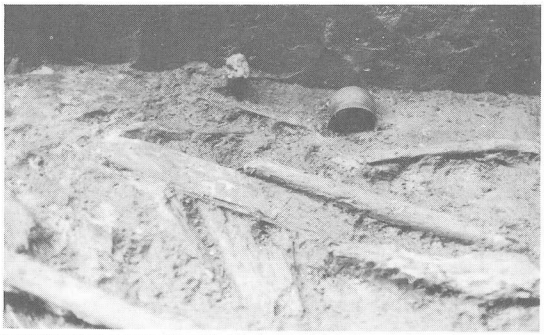
その他

Ｅ地区ではⅦ層が硬質の青灰色粘土層となって、遺構の存在が予想されるような遺物の出土がみられたが、最終的には４つの土器群が検出されたのみで、溝や柱穴様のものはみとめられなかった。



第44図　Ｆ地区検出状況

第 45 図　F 地区遺物検出状況

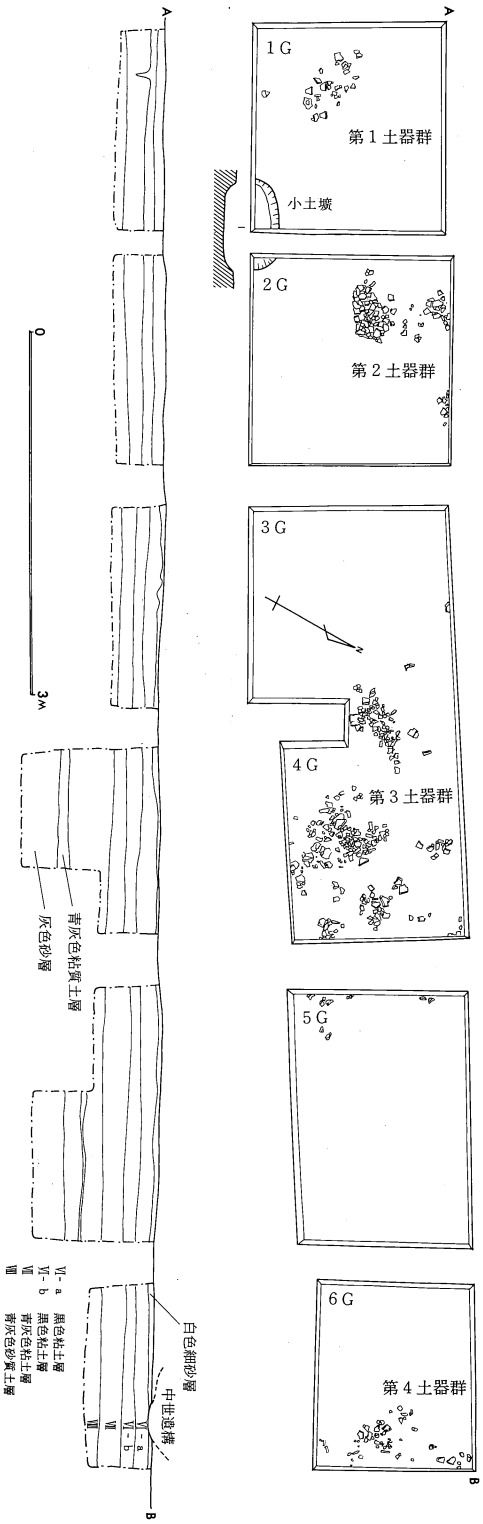


第 49 図　木器検出状況

（上）第 46 図　木製品検出状況

（中）第 47 図　須恵器杯蓋検出状況

（下）第 48 図　土師器小型丸底壺検出状況



第50図　E地区遺物検出状況及土層断面図

E地区でも東半に至ると、このⅦ層は徐々に粘性が増し、暗色化して遺物も全くみられなくなってゆく。これに伴って、Ⅵ—a層は砂層が顕著となり、木器・木片の出土が目立ってくるのである。Ⅵ—b層は、徐々に厚みを増し、炭層もみられなくなり、暗茶色化して植物遺体を多く含むようになる。さらに、土器などの遺物はⅥ—a層に限られるようになる。

このような状況をみると、E地区の東半からは、巾の大きな河道か、あるいは湿地帯となっていたと思われる。E地区の東半分やF地区の遺物出土状況(第44図)は、このような低湿地への流れ込みであろう。

以上の所見からすると、今回の調査地点に限っていえば、古墳時代の遺構の存在する可能性を示したのはE地区の西側一帯のみであることが判明した。この場所の出土土器の密度からみると、すぐ近隣に住居址が遺存しているものと考えられる。今後の広範囲な調査に期待したい。

2．古墳時代の遺物

今回、各区より検出された古墳時代遺物は、多量の土師器をはじめとして須恵器・木製品などである。各個の遺物の諸特徴については、できうるかぎり一覧表に示したので参照されたい。

古墳時代の遺物が検出されたのは、おもにD・E・F地区であり、それらはⅥ—a・Ⅵ—b・Ⅶ層にわたってみられた。とくにE地区では4群にわたって土器群が検出された。しかしながら、先にも述べたように、古墳時代の遺構として明確なものはなく、遺構に伴ったものはきわめて少ない。

E地区の遺物

E地区ではⅥ—a・Ⅵ—b・Ⅶ層にわたって遺物が検出された。Ⅵ—a層出土の遺物は、多くの土師器とともに須恵器が伴出している。このうち須恵器はⅠ型式に属するものであり、当遺跡において須恵器がみられるのは、Ⅵ—a層より上層で、Ⅵ—b以下では須恵器は検出されていないということからも注目すべきものであ

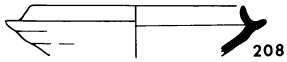
る。なお、この層からは製塩土器と思われる土器底部(106)が出土している。

Ⅵ—b層は須恵器を全く含まず、1G・2G・6Gにそれぞれ第1・2・4土器群が存在する。土器群は遺構に伴ったものではなく、数個体の土器が流れ込んだような状況を呈している。これらのうち、第4土器群では、口縁端部をつまみあげ状に引きあげたいわゆる庄内式の甕、(128)が含まれている。

Ⅶ層は、3G・4G・5Gにわたって土器がみられ、うち4Gに第3土器群が存在する。第3土器群では、右上がりの叩きを主体とした甕と、外面に刷毛、内面に篦削りを施した甕などが出土している。叩きを施した甕の底部はすべて平底であり、(146)の内面には刷毛目調整がなされている。3G・5G出土の土師器は、第3土器群とほぼ同様であるが、底面まで叩きを施した丸底の壺や、吉備地方に多くみられる屈曲して直立する口縁部をもつ甕(137)がみられる。

F地区の遺物

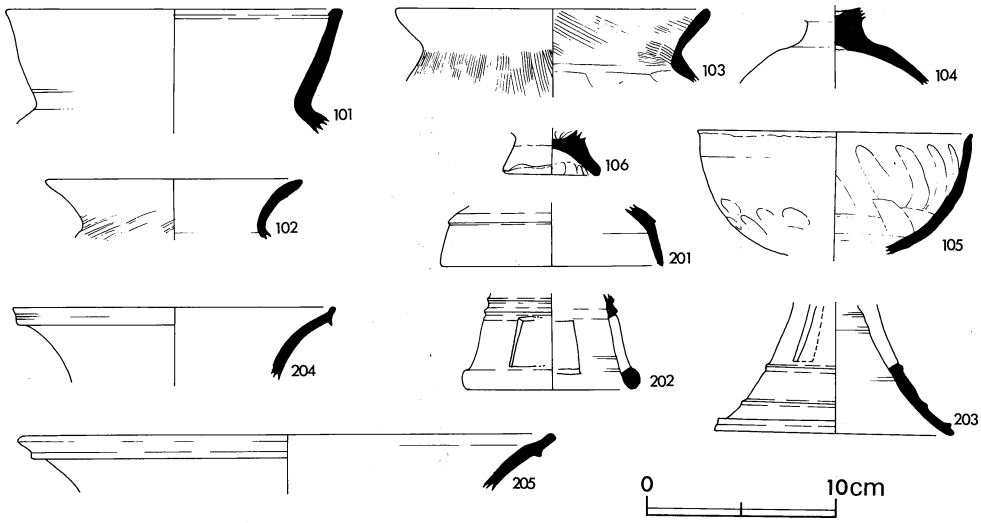
F地区からは、Ⅵ—a層と河道内の灰色砂層から遺物が検出されている。Ⅵ—a層は河道を覆っている層であり、小型丸底壺の完形品や壺・甕などの多量の土師器、杯身・杯蓋・甕など



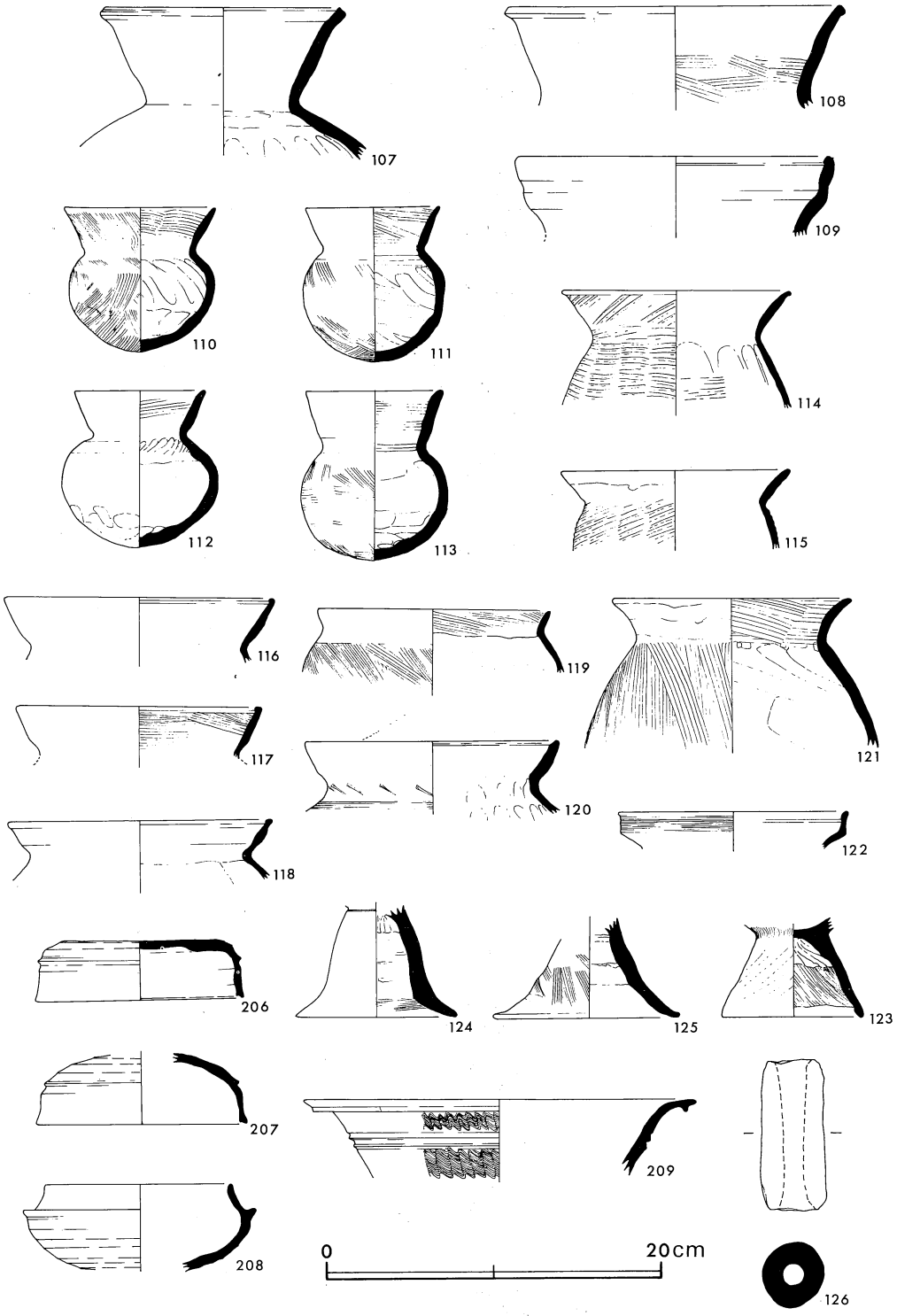
第51図　D地区溝状遺構検出須恵器実測図

の須恵器、土師質土錘、木片等多くの遺物が検出されている。このうち小型丸底壺(110～113)は、体部径が口径にほぼ等しいか、ないしは体部径がやや凌駕しているものである。甕はやや内湾して上方へのび、端部内側に段を有するもの(116～120)であり、概ね古墳時代前期の土師器である布留式の範疇に含まれる。また(122)は、吉備地方に多くみられる甕の口縁部であり、(123)は東海地方のS字口縁をもつ台付甕の脚台である。土師器に伴う須恵器は、古式のものであり、伴出する土師器とともに注目すべきものである。しかしながら、先に述べたように、これらの遺物は全く遺構に伴ったものではなく、より慎重な検討が必要であろう。

灰色砂層内の遺物は、河道内の深掘部で検出されたものであり、土師器とともに須恵器が含まれている。土師器の中には、口径が体部径を上回る小型丸底壺(115)が含まれている。須恵器は外面に格子目叩きを持つ甕と椀形土器とがあるが甕は焼成不良で赤褐色を呈している。須恵器としては最古様式に層するものである。



第52図　Ⅵ- a層出土土器実測図(1)



第53図　Ⅵ- a 層出土土器実測図（2）

〈E地区〉

付表5　Ⅵ-a層出土土器一覧表

番号	器種	法量	個々の特徴	出土層位	色調	胎土
101	壺	口径：18.2cm	口縁部はやや内湾ぎみに上方へ伸び、端部は肥厚し内面に段を有す。端部に狭い面を有す。	E地区8G Ⅵ—a層	内面：黄灰色 外面：乳灰色 断面：灰色	精良な粘土
103	甕	口径：16.9cm	くの字形に外反する口縁部。端部はやや肥厚し、丸くおさめる。口縁部内面は斜め刷毛、体部外面は縦刷毛、内面は横篦削り(右→左)。口縁部外面に黒斑。	E地区9G Ⅵ—a層	内面：暗茶褐色 外面：〃 断面：〃	黒雲母を多く含む
106	製塩土器	底径：5.2cm	高台状の底部。端部は丸くおさめる。内面に指圧痕が遺る。	E地区8G Ⅵ—a層	内面：灰色 外面：乳灰色 断面：黒灰色	0.1cm位の白色砂粒を多く含む
201	(須恵器) 杯蓋	口径：12.0cm	口縁部は直線的に下り、端部は丸くおさめる。稜は断面三角形を成す。天井部外面は回転篦削り。	E地区8G Ⅵ—a層	内面：灰色 外面：〃 断面：〃	精良な粘土
202	(須恵器) 高杯	脚底径：9.6cm	脚部は2段の断面三角形の凸帯を有し、やや外反して下る。端部は肥厚し、外面に段を有す。四方向に方形透しをもつ。	E地区 (3G—4G土手) Ⅵ—a層	内面：暗灰色 外面：〃 断面：暗紫色	白色砂粒を多く含む
203	(須恵器) 高杯	脚底径：12.8cm	脚部は外反して下り、断面三角形の凸帯を3段めぐらす。端部は丸くおさめる。三方向に方形透し有する。	E地区9G Ⅵ—a層	内面：灰色 外面：〃 断面：〃	
204	(須恵器) 甕	口径：17.4cm	口縁部は外反して上方に伸び、端部近くで断面三角形の凸帯を有したのち、やや内傾して端部にいたる。端部は丸い。	E地区7G Ⅵ—a層	内面：灰褐色 外面：〃 断面：灰白色	精良な粘土
205	(須恵器) 甕	口径：28.8cm	口縁部はゆるやかに外反し、端部近くで断面三角形のややにぶい凸帯を有す。端部はやや内湾し、方形におさめる。内面に自然釉。	E地区 Ⅵ—a層	内面：灰色 外面：〃 断面：〃	精良な粘土

〈F地区〉

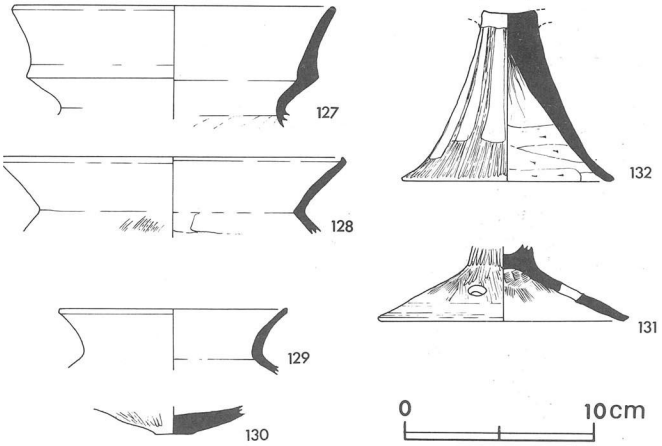
付表6　Ⅵ-a層出土土器一覧表

番号	器種	法量	個々の特徴	出土層位	色調	胎土
107	壺	口径：15.0cm	口縁部はゆるやかに外反して上方に伸びる。端部は方形におさめ、凹線をめぐらす。体部内面に指圧痕が遺る。	F地区 Ⅵ—a層	内面：淡茶灰色 外面：〃 断面：〃	白色砂粒を多く含む
109	壺	口径：19.4cm	口縁部は2段に屈曲し、端部は肥厚して内側に段を有す。内・外面とも横ナデ。	F地区 Ⅵ—a層	内面：茶灰色 外面：〃 断面：灰色	
110	小型丸底壺	口径：9.1cm 器高：8.7cm 体部径：8.9cm	口縁部は基部で外反し、上方へ伸びる。端部は薄く丸くおさめる。口縁部内外面、体部外面は刷毛。体部内面は横篦削り(右→左)。口縁部・体部外面に黒斑。	F地区 Ⅵ—a層	内面：灰茶色 外面：赤褐色 ～灰茶色 断面：灰茶色	
111	小型丸底壺	口径：8.2cm 体部径：8.7cm 器高：9.4cm	口縁部はやや外反ぎみに上方へ伸び、端部は丸くおさめる。口縁部内面および体部外面は刷毛。体部内面は横篦削り(右→左)。	F地区 Ⅵ—a層	内面：灰褐色 外面：〃 断面：〃	微破粒を多く含む

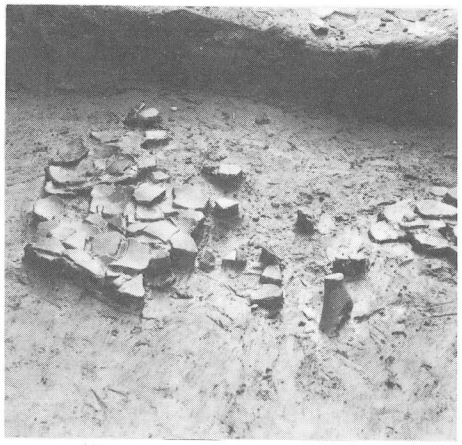
付表７　Ⅵ- a 層出土土器一覧表

番号	器　種	法　量	個々の特徴	出土位置・層位	色　調	胎　土
112	小型丸底壺	口　径：7.9cm 体部径：9.4cm 器　高：9.5cm	口縁部は基部で外反したのち、直線的に上方へ伸びる。端部は丸くおさめる。口縁部内面は荒い刷毛。体部内面下位に指圧痕。	F地区 Ⅵ－a 層	内面：茶灰色 外面：茶灰色 ～赤褐色 断面：茶灰色	0.5cm位の大粒の砂粒を多く含む
113	小型丸底壺	口　径：8.4cm 体部径：8.9cm 器　高：10.3cm	口縁部は肥厚して直線的に上方へ伸び端部は丸くおさめる。口縁部内面および体部外面は刷毛。体部内面上位は横篦削り(左→右)、下位に指圧痕が遺る。	F地区 Ⅵ－a 層	内面：淡茶灰色 外面：〃 断面：〃	粗砂粒を多く含む
114	甕	口　径：14.0cm	口縁部は外反して上方へ伸びる。端部は肥厚して外側に段を有す。口縁部外面は右上がり叩き。体部外面は水平叩き。体部内面の一部に横刷毛。	F地区 Ⅵ－a 層	内面：黒茶色 外面：〃 断面：黒　色	砂粒を多く含む
119	甕	口　径：14.3cm	口縁部は短く上方へ伸び、端部は丸い。口縁部内面は粗い刷毛。体部外面は刷毛、内面は横ナデ。	F地区 Ⅵ－a 層	内面：淡茶灰色 外面：〃 断面：〃	砂粒を多く含む
120	甕	口　径：15.5cm	口縁部は基部で外湾したのち、内湾しながら上方にのび、端部は丸く内側に段を有す。頸部外面にヘラによる刺突文、体部外面に櫛描直線文を施す。体部内面に２段の指圧痕が遺る。口縁部内側に黒斑。	F地区 Ⅵ－a 層	内面：茶灰色 外面：〃 断面：〃	
121	甕	口　径：14.6cm	口縁部は基部より外反し、端部は丸くおさめる。口縁部内面に斜め刷毛、体部外面に縦刷毛を施す。体部内面は篦削りか。口縁部外面に３段の接合痕が遺る。	F地区 Ⅵ－a 層	内面：灰白色 外面：乳褐色 断面：〃	砂粒を多く含む
122	甕	口　径：14.0cm	口縁部は屈曲したのち、短く直立し、外面に軽い沈線を施す。端部は肥厚し、丸くおさめる。	F地区 Ⅵ－a 層	内面：淡茶灰色 外面：〃 断面：〃	砂粒を多く含む
123	甕	底　径：8.6cm 脚　高：4.9cm	脚台は内湾ぎみに下り、端部に折り返しを持つ。体部外面、脚部内面下位に刷毛を施す。外面および脚天井部に煤付着。	F地区 Ⅳ－a 層	内面：茶褐色 外面：〃 断面：〃	黒色砂粒を多く含む
124	高　杯	底　径：9.8cm 脚　高：6.6cm	脚部は内湾ぎみに下り、屈曲して広がる。端部は丸い。内面上位は横篦削り(左→右)、下位は粗い刷毛を施す。	F地区 Ⅳ－a 層	内面：暗茶色 外面：〃 断面：〃	砂粒を多く含む
125	高　杯	底　径：11.3cm	脚部は外反ぎみに下り、端部は肥厚して外側に軽い段を有す。外面は縦刷毛。内面に３段の接合痕が遺る。	F地区 Ⅵ－a 層	内面：茶灰色 外面：〃 断面：〃	砂粒を多く含む
126	土　錘	長　さ：9.1cm 外　径：3.8cm 内　径：1.3cm 重　さ：	棒状の土師質土錘である。孔の両端は広がり磨滅している。外面に黒斑。	E地区 Ⅵ－a 層	内面：暗茶灰色 外面：暗茶灰色 ～黒灰色 断面：暗茶灰色	0.1cm位の白色砂粒を多く含む
206	杯　蓋	口　径：12.7cm 器　高：3.7cm	口縁部はやや外反して下方に下り、端部は内傾する凹面をなす。稜は短く断面三角形を呈す。天井部は低く平らに近い。	F地区 Ⅵ－a 層	内面：灰白色 ～灰黒色 外面：灰黒色 断面：〃	精良な粘土
207	杯　蓋	口　径：13.8cm	口縁部はやや外反ぎみに下方に下り、端部はほぼ水平な凹面をなす。稜は短く断面三角形を呈す。天井部は比較的高く丸い。	F地区 Ⅵ－a 層	内面：灰　色 外面：〃 断面：〃	精良な粘土

208	杯　身	口　径：11.3cm たちあがり高： 1.6cm 受部径：14.2cm	たちあがりはやや内傾して伸び、端部は丸くおさめる。受部は上外方に伸び端部は丸い。底部は深く丸い。	F地区 Ⅵ－a 層	内面：灰　色 外面：　〃 断面：　〃	
209	甕	口　径：24.0cm	口縁部は端部付近で強く外反し、端部に1条の凸線が巡る。端部は丸く仕上げる。口縁上位に2条の凸線が巡り、上方に1条(15本)、下方に1条(18本)の波状文を施す。自然釉がかかる。	F地区 Ⅵ－a 層	内面：黒灰色 外面：　〃 断面：暗紫色	



第54図　Ⅵ-b層出土土器実測図

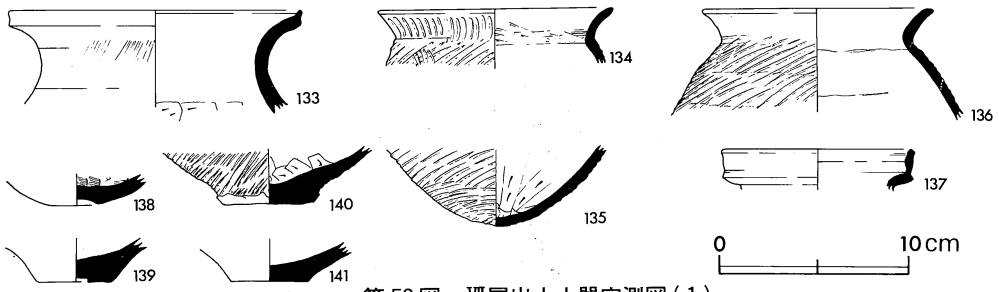


第55図　第2土器群検出状況

〈E地区・第1・2・4土器群〉

付表8　Ⅵ-b層出土土器一覧表

番号	器　種	法　量	個々の特徴	出土層位	色　調	胎　土
127	壺	口　径：17.4cm	口縁部は2段に屈曲し、内側に段を、外側に稜を有す。端部は丸くおさめる。体部内面は横篦削り(左→右)。	E地区6G 第4土器群 Ⅵ－b 層	内面：乳灰色 外面：　〃 断面：　〃	白色砂粒を多く含む
128	甕	口　径：18.6cm	口縁部はやや外反ぎみにくの字形に屈曲し、端部はつまみ上げ状に肥厚させる。体部外面は細かい右上がりの叩き。内面は横篦削り(右→左)。	E地区6G 第4土器群 Ⅵ－b 層	内面：茶黒色 外面：　〃 断面：　〃	0.1～0.2cm位の白色砂粒を含む
129	甕	口　径：12.4cm	口縁部はゆるやかに外反し、端部は薄く外側に狭い面をなす。器表面は磨耗がはげしいため調整は不明。	E地区1G 第1土器群 Ⅵ－b 層	内面：乳褐色 外面：　〃 断面：　〃	0.1～0.2cm位の砂粒を多く含む
130	甕	底　径：2.0cm	底部は狭い平底で、外面には縦篦磨きを施す。外面に煤付着。129と同一個体と思われる。	E地区1G 第1土器群 Ⅵ－b 層	内面：乳灰色 外面：黒灰色 断面：乳褐色	0.1～0.2cm位の砂粒を多く含む
131	高　杯	底　径：13.4cm	脚部は一度屈曲して大きく広がる。端部は丸くおさめる。外面は縦篦磨き十縦刷毛。内面は刷毛。3方向の透しをもつ。	E地区6G 第4土器群 Ⅵ－b 層	内面：乳灰色 外面：　〃 断面：　〃	精良な粘土
132	高　杯	底　径：11.4cm	脚部は杯部からそのまま外反して広がり、端部は丸くおさめる。外面は縦篦磨き十縦篦削り(上→下)。内面下半は横篦削り(左→右)。絞り目痕が遺る。	E地区2G 第2土器群 Ⅵ－b 層	内面：乳灰色 外面：　〃 断面：　〃	精良な粘土

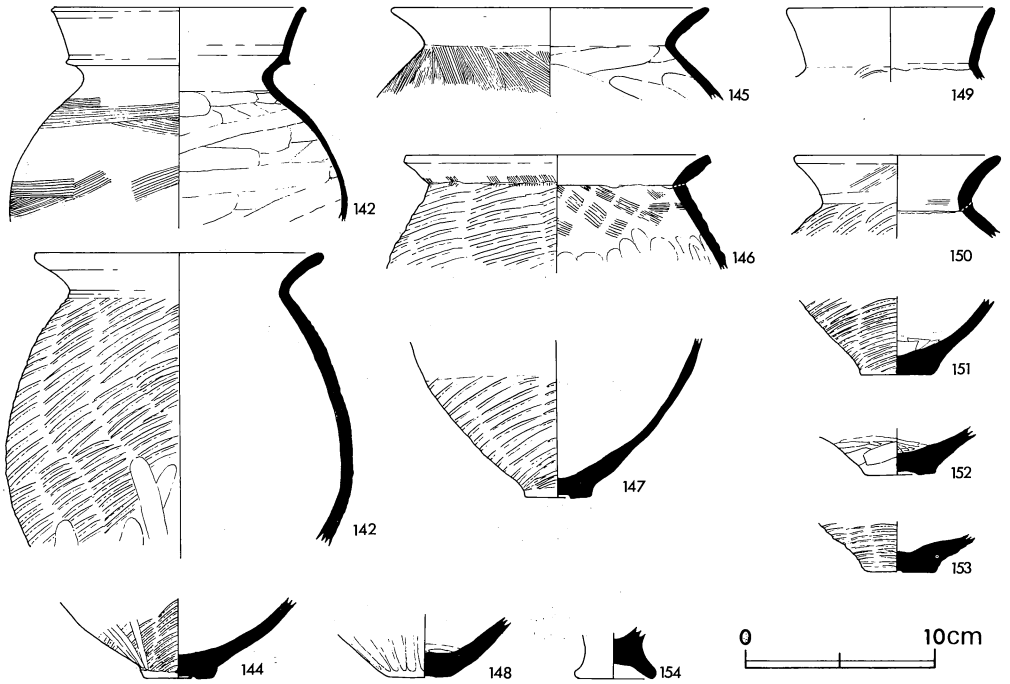


第56図　Ⅶ層出土土器実測図（1）

〈E地区〉

付表9　Ⅶ層出土土器一覧表

番号	器種	法量	個々の特徴	出土層位	色調	胎土
133	壺	口・径：15.8cm	口縁部は外反して上方へ広がる。端部はつまみあげて外面に面を有す。外面は刷毛十横ナデ。体部内面は横篦削り（右→左）。	E地区3G Ⅶ層	内面：乳褐色 外面：〃 断面：乳黒灰色	微砂粒を多く含む
134	甕	口径：12.6cm	口縁部は外反して上方へ伸び、端部は丸くおさめる。口縁部外面は縦叩き、内面は左上がりの叩き。体部外面は右上がりの叩き十縦叩き。	E地区5G Ⅶ層	内面：黒灰色 外面：暗茶灰色 断面：黒灰色	白色微砂粒を多く含む
135	甕	現存高：4.0cm	丸底の底部・底部外面は右上がりの叩き十水平叩き。内面は縦篦削り。134と同一個体と思われる。	E地区5G Ⅶ層	内面：黒灰色 外面：暗茶灰色 断面：黒灰色	白色微砂粒を多く含む
137	甕	口径：10.4cm	口縁部は屈曲したのち、内湾して上方へのび、外側に稜を有す。端部は方形におさめる。内外面とも横ナデ。外面に煤付着。	E地区5G Ⅶ層	内面：黄褐色 外面：黒灰色 断面：灰黄褐色	微破粒を多く含む

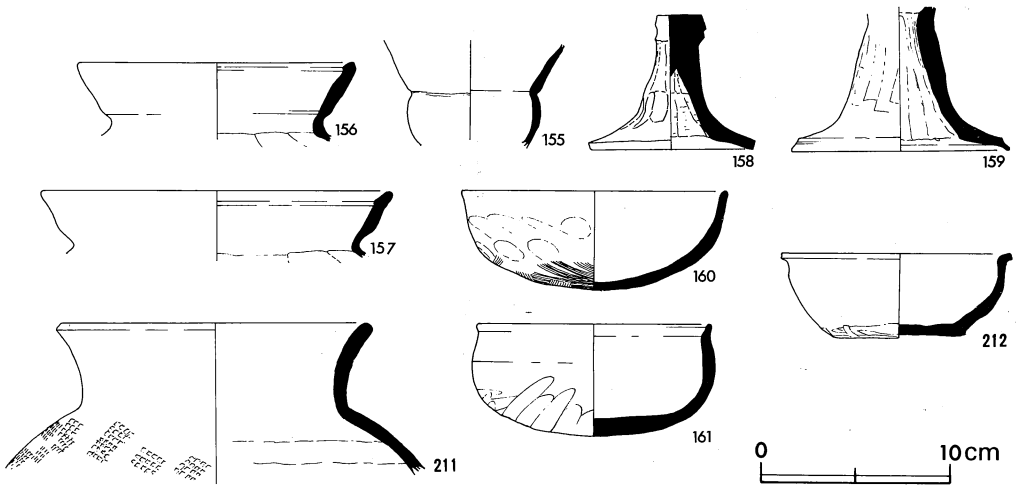


第57図　第3土器群出土土器実測図

〈E地区・第3土器群〉

付表10　第3土器群出土土器一覧表

番号	器種	法量	個々の特徴	出土層位	色調	胎土
142	甕	口径：13.8cm 体部径：18.2cm	口縁部は2段に屈曲し、外側に断面三角形の稜が巡る。体部外面上位と中位に横刷毛。内面は横篦削り(左→右)。外面に煤付着。	E地区4G 第3土器群Ⅶ層	内面：乳灰色 外面：〃 断面：〃	0.1～0.2cm位の白色砂粒を多く含む
143	甕	口径：15.6cm 体部径：18.7cm	口縁部は外反して上方へ伸び、端部はやや肥厚して丸くおさめる。体部外面上位は右上がりの叩き。下位は縦指ナデ。外面に煤付着。	E地区4G 第3土器群Ⅶ層	内面：黄灰色 外面：黄灰色～黒灰色 断面：黄灰色	精良な粘土
145	甕	口径：17.3cm	口縁部はくの字形に屈曲し、やや外反ぎみに上方へのびる。体部外面は縦刷毛、内面は横篦削り(右→左)。	E地区4G 第3土器群Ⅶ層	内面：茶灰色 外面：〃 断面：〃	微石粒を多く含む
146	甕	口径：16.6cm	口縁部はくの字形に屈曲し、端部は方形におさめ狭い面をなす。体部外面は右上がりの叩き、頸部は縦刷毛。体部内面上位は刷毛、中位に指圧痕が遺る。頸部内外面に接合痕が遺る。	E地区4G 第3土器群Ⅶ層	内面：灰褐色 外面：赤褐色 断面：灰褐色	0.2cm位の白色砂粒を多く含む
147	甕	底径：3.6cm	底部は平底で中央がくぼんでいる。体部外面下位は右上がりの叩き、中位は横ナデ。	E地区4G 第3土器群Ⅶ層	内面：茶褐色 外面：〃 断面：〃	微砂粒を多く含む
154	製塩土器	底径：4.4cm	高台状の底部。端部は丸くおさめる。器表面は剝落がはげしく調整は不明。	E地区4G 第3土器群Ⅶ層	内面：赤灰色 外面：〃 断面：黒灰色	0.2cm位の砂粒を多く含む



第58図　灰色砂層出土土器実測図

〈F地区〉

付表11　Ⅷ層出土土器一覧表

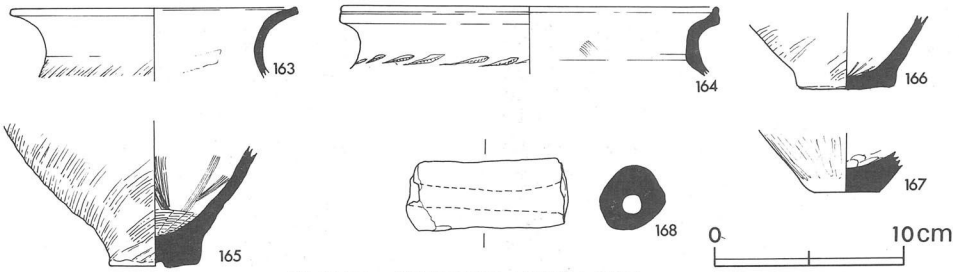
番号	器種	法量	個々の特徴	出土層位	色調	胎土
156	甕	口径：15.0cm	口縁部は基部で外反したのち上方へ伸びる。端部は肥厚して内側に段を有す。体部内面は横篦削り(右→左)。	F地区 最下砂層(Ⅷ層)	内面：茶灰色 外面：〃 断面：〃	砂粒を多く含む
158	高杯	底径：9.0cm 脚高：5.7cm	脚部はゆるやかに屈曲して広がる。端部は方形におさめる。脚部外面は粗い篦磨き、内面は横篦削り(右→左)十横ナデ。	F地区 最下砂層	内面：明赤褐色 外面：〃 断面：〃	

159	高　　杯	底　径：11.7cm	脚部はゆるやかに屈曲して広がり、端部は外下方へ引き出し丸くおさめる。脚部外面は縦篦削り。内面は横篦削り(右→左)。絞り痕を遺す。	F地区 最下砂層	内面：淡茶灰色 外面：　〃 断面：　〃	砂粒を多く含む
160	鉢	口　径：14.4cm 器　高：5.4cm	底部より曲線的に移行し端部は丸くおさめる。底部外面は粗い刷毛。上位に指圧痕が遺る。	F地区 最下砂層	内面：茶灰色 外面：　〃 断面：茶褐色	粗い砂粒を多く含む
161	鉢	口　径：12.7cm 体部径：13.1cm	底部より曲線的に移行し、内湾して立ち上がる。端部は外反ぎみに引き出し丸くおさめる。体部外面下位は篦削り(下→上)。	F地区 最下砂層	内面：暗茶褐色 外面：淡茶灰色 断面：　〃	精良な粘土
211	(須恵器) 甕	口　径：17.0cm	口縁部は外反ぎみに上方へ伸び、端部は方形におさめる。体部外面は格子目叩き十横ナデ。体部内面に2段の接合痕が遺る。外面に黒班。	F地区 最下砂層	内面：灰褐色 外面：赤褐色 ～黒色 断面：灰褐色	セピア砂粒を含む、焼成不良。
212	(須恵器) 椀形土器	口　径：12.4cm 器　高：4.6cm	底部より屈曲して曲線的に上方へ伸びる。口縁部は外反して端部は狭い凹面をなす。外面下位は手持ち篦削り。底面は未調整。	F地区 最下砂層	内面：暗紫色 外面：灰紫色 断面：暗紫色	精良な粘土

第59図　第3土器群検出状況

その他の遺物

第60図は、52年度の試掘調査で検出された遺物である。今回の地区名では、D地区にあたるが、部分的な試掘の関係から出土層位は不明確である。(164)は、頸部に櫛描き刺突文、口縁部に一条の凹線をめぐらしている甕である。(165)は甕の底部で内面を刷毛で調整している。(168)は土師質の棒状単孔土錘である。



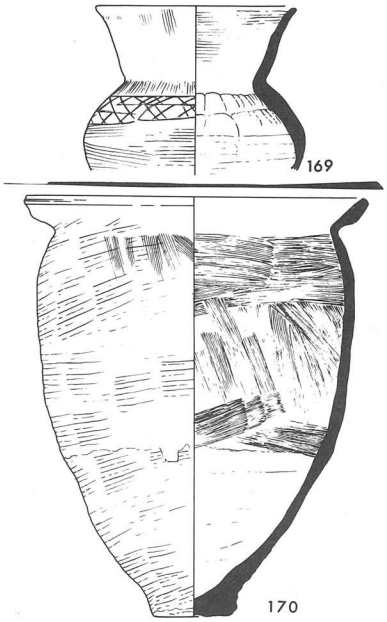
第60図　試掘調査出土遺物実測図

〈D地区〉

付表12　試掘調査出土土器一覧表

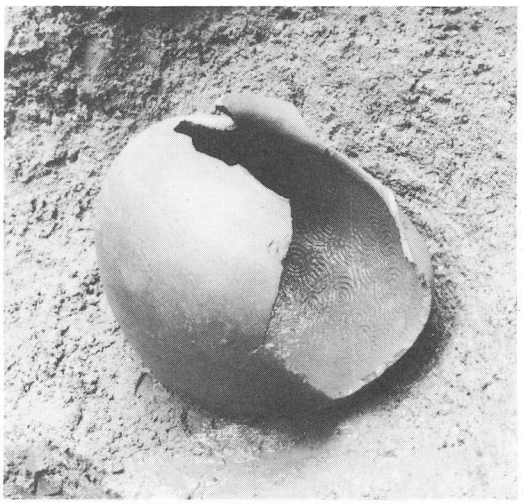
番号	器　種	法　量	個々の特徴	出土層位	色　調	胎　土
164	甕	口　径：20.6cm	口縁部は直立したのち外反する。端部は上方へ引きあげ、面をなし、1条の凹線を巡らす。頸部に粗い右上がりの櫛描烈点文。	D地区 黒色粘土	内面：淡茶灰色 外面：　〃 断面：　〃	褐色砂粒を多く含む

165	甕	底　径：4.9cm	底部は平底で中央がくぼんでいる。外面は右上がりの叩き、内面底部は横刷毛、中位は縦刷毛。	D地区 黒色粘土	内面：淡茶灰色 外面：　〃 断面：　〃	
168	土　錘	長　さ：8.7cm 外　径：3.8cm 内　径：1.2cm 重　さ：	棒状のつくりの粗い土師質土錘である。外面黒斑を有する。	D地区 黒色粘土	内面：茶灰色 ～黒灰色 外面：茶灰色 断面：　〃	白色砂粒を多く含む

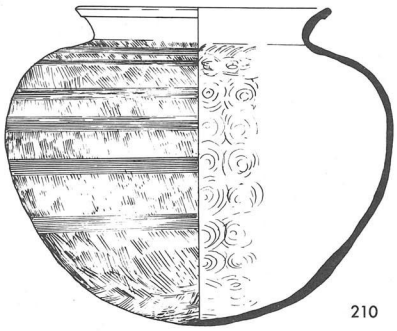


第61図　その他の出土遺物実測図

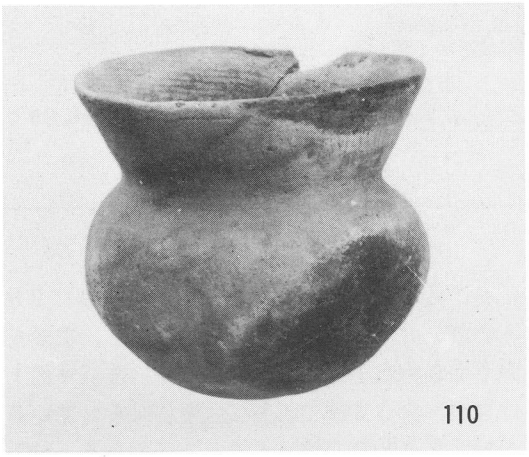
その他、(169)は口縁部がやや内湾ぎみに上方へのびたのち、口縁端部付近で外反し、端部を丸くおさめた小型丸底壺であるが、体部外面上位に篦による2段の鋸歯文状帯を巡らしている。E地区Ⅵ－b層で検出されたものである。(170)は、ほぼ完形の甕で、口縁部は体部よりくの字形に屈曲し、端部付近で肥厚して、端部は丸みをもった方形におさめ、1条のかるい凹線を巡らす。体部外面は右上がりの叩き、内面は刷毛目調整を施している。(210)は、ほぼ完形の須恵器甕で、口縁部は外反して端部に方形に口唇を巡らす。体部外面は平行叩きののちカキ目、内面には青海波がみられる。(170)・(210)はいずれもB地区より出土したものであるが、工事の際取り上げられたもので、(170)は最下層の砂層（Ⅷ層）から、(210)の出土層位は不明である。

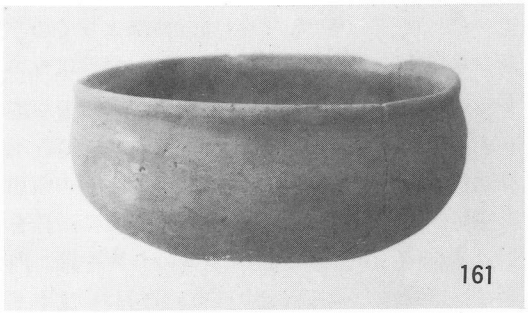


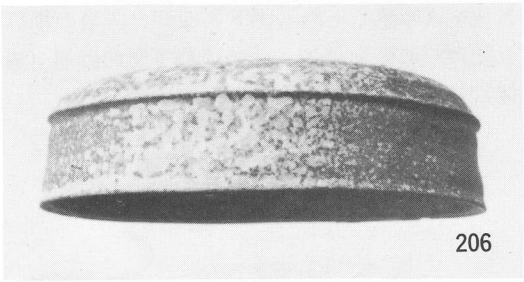
第63図　須恵器甕検出状況

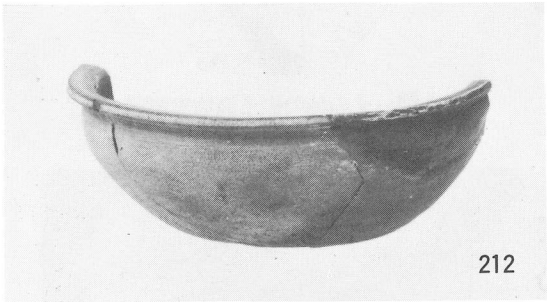


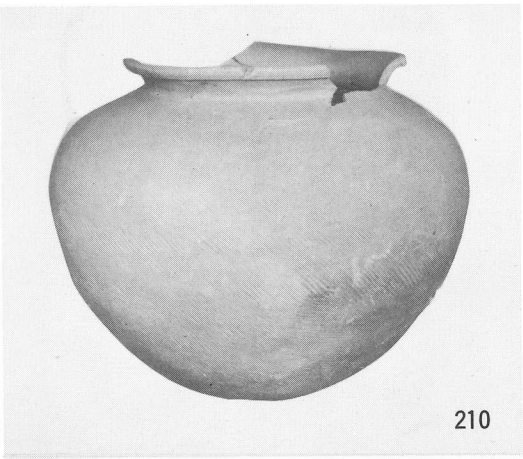
第62図　B地区出土須恵器実測図
（8分の1）

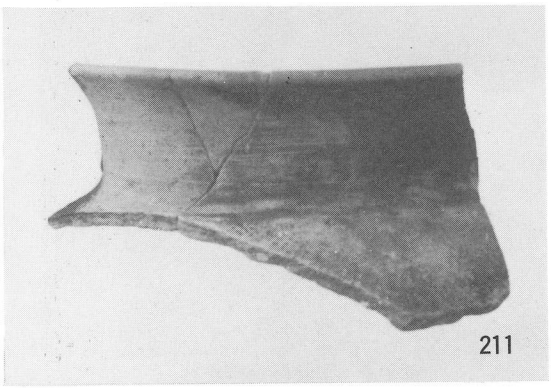












第64図　出土古墳時代土器

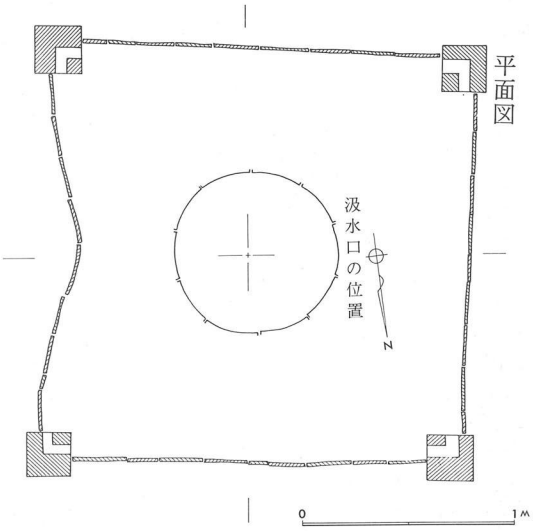
第７章　近代の遺構・遺物

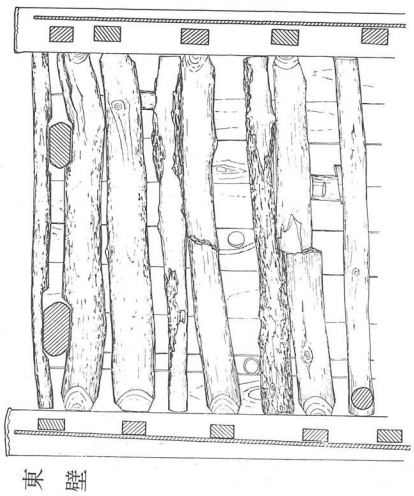
６号井戸

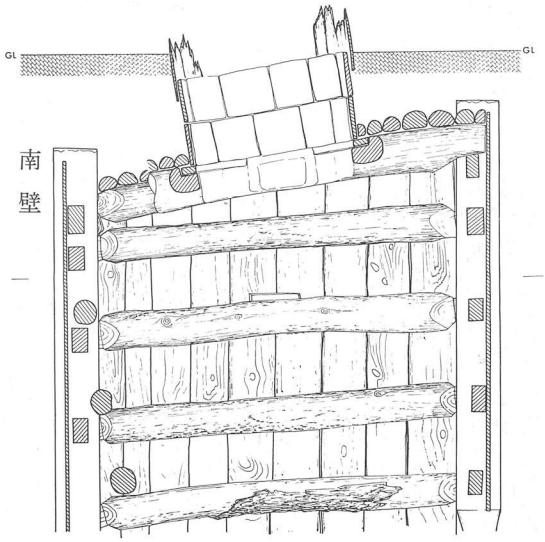
昭和53年２月４日、蔵人遺跡調査区の北東、第４－Ⅰ工区において押管工法による下水管を埋設中、下水管が架橋様の大規模な木組みに当たり工事が進まなくなった。２月５日から、該当部分を３×2.3ｍにわたって地表から掘削を開始し、木組みの解明に努めた。

以後、２月８日までの調査によって、本木組みは 1.8ｍ（１間）四方の木室の天井部に汲水口を取付けた近代の大規模な井戸であることが判明した。したがって、この井戸を蔵人遺跡の第６号井戸と呼称する。

井戸は従来の名称にしたがえば、上下２段構造の井戸といえるが、実体としては１間立法の







第65図　６号井戸実測図

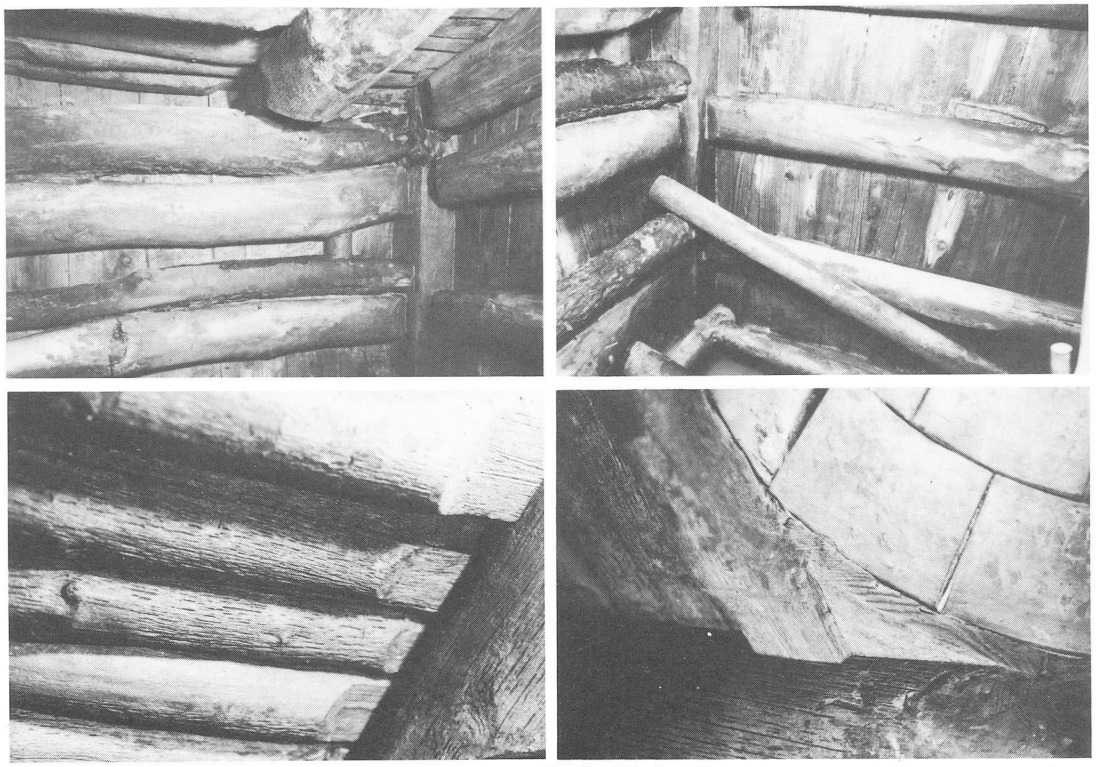
地下木組み貯水槽の天井部に、円形縦板と瓦製塼を井戸枠とした汲水口を取り付けたものである。最大の特徴は貯水部分が地下構造のため、四方の柱は一辺23cmの角材を使用し、また天井部分は上からの土圧に耐えられるように、径20～25cmの丸太材を「井」の字形に架構し、その中央部分に円形汲水口を取り付けていることである。

四方の側壁は杉板を縦に配して壁体をつくっているが、これも土圧に耐えられるように各辺5本の丸太の貫材を通して、堅固な構造をなしていた。しかし、土圧に耐えられないため特に東壁の変形が激しく、沈下した上にさらに貫材の破損が目立ち、東壁が内側に張出してきている。この変形を防ぐため後補材によって補強しており、この井戸を保とうとする努力の跡がみられた。

天井の汲水口は内径76cmの円形のもので、瓦製塼10枚を2段（計20枚）に積み、その外側は精良な粘土によってこの塼を取り付けている。その上は杉板によって円形縦板構造をしており、この上位はもとは地上に出ていたらしい。

井戸内の貯水槽は天井下約20cmは空洞になっていたが、以下は土砂が充満していた。この土砂は下は湧水の激しい灰白色粗砂層、その上層は粘土を混る灰色砂層、さらに黒灰色粘土層となっている。最上層には黒色粘土層が堆積していたが、この層にはガラス瓶、瓦、磁器、陶器、木片、靴、自転車の廃品などの雑多なものが投げ込まれており、本井戸も土砂の堆積が多くなってもはや使用に耐えられなくなっていたことがわかる。ただ、遺物中には木管（ボビン）と呼ばれる紡績関係遺物が数点あり、当地方が大正時代から紡績工業が盛んであったことを、この井戸の出土品からもうかがうことができた。

出土遺物からみると戦前にはすでに廃棄されていたらしい。



第66図　6号井戸各部

第8章　総　　括

(1)　古墳時代の土器について

出土土器は、土師器と須恵器がある。これらの土器は、とくにE地区においてⅥ－a層・Ⅵ－b層・Ⅶ層、F地区においてⅥ－a層・灰色砂層として取り上げることができた。このうち最上層にあたるⅥ－a層出土のものが最も多く、遺跡の最盛期を示している。

Ⅶ層は、青灰色粘土層で、まとまったものとしてE地区で第3土器群として検出された。(第57図) これらは外反する口縁をもち、外面に右上がりの叩き目を施す大型の平底甕が主体である。(142) は口縁部が屈曲したのち直立するもので、胎土も乳白色を呈し、山陰地方に多くみられるものである。その他、第3土器群以外では、底部まで叩き目調整が施された尖り底の甕 (135) がみられた。これらの遺物は、大和における例に比定すると纒向2式期に主体があるものと思われる。

Ⅵ－b層は、E地区の西半分において検出された層位で、Ⅵ－a層とⅦ層に挟まれた10cm程度の厚さの灰色粘土である。E地区第1・2・4土器群とも細片が主体であり、図化できたものはわずかである。甕 (128) は口縁部をつまみ上げ状に肥厚させたもので、体部外面にわずかではあるが右上がりの叩きがみられる。高杯(131)は椀形の杯部をもつもので、脚端に向けて直線的に広がっている。これらはいずれもⅦ層に連続するものとみられ、庄内式でも新しい段階、纒向3式期に相当するものと思われる。

Ⅵ－a層[12]は、スミ混りの黒色粘土層で、古墳時代土器包含層としては、最上層に相当し、最も新しい時期を示すものである。E・Fの両地区で同一層序としてとらえることができた。土師器は、所謂布留式土器と呼ばれる斉一性の強い土器で、壺・小型丸底壺・甕・高杯などがある。壺は口縁部がまっすぐに上方へ開き、端部に狭い面をなすもの (101・107・108) と口縁部が2段に屈曲するもの (109)がある。小型丸底壺は口径が体部と同径か、ないしはやや小さいもので、口縁部の立ち上がりも体部より小さい (110～113)。調整は細かい刷毛を用いており、ヘラ磨きはみられない。甕は口縁部が内湾ぎみに外反し、端部が内側へ肥厚して段を有するもの (116～118・120) と外反して丸くおさまるもの (103・121) などがある。(102・114・115) は古い段階のものが混入したものであろう。(122) は吉備地方で多くみられるもの、(123) は東海地方でみられるS字口縁を有する台付甕の脚台部である。(121) は口縁端部が丸くおさめられる長胴化した甕で、より後出的なものである。

これらに共伴する須恵器は、中村浩氏によるⅠ型式の細分[13]では、最古式にあたる1段階のもの (202・204・205) から4段階に至るもの (208) まで出土しており、時期的な差が著しい。流木をともなう土器包含層としての性格から、時期的な巾は当然考えられることではあるが、それでも概してF地区に古相を呈するものが目立つようである。

F地区の灰色砂層は、出土遺物は少ないが、やはり最古式の須恵器を検出したことにより、一応注意を要するものである。

土師器は、口縁端部内面に狭い面をなす甕(156・157) をはじめとして、小型丸底壺・高杯・鉢がみられる。(155) の小型丸底壺は、より古相をもち、混入したものであろうが、全般に先述したⅥ－a層よりは若干遡るものと思われる。

須恵器甕 (210) は、体部に格子叩きを有する甕であるが、口縁内外面の回転横ナデが特徴的である。(211) は土師器鉢を模倣したものと考えられ、底部は手持ちヘラケズリ調整を行っている。いずれも赤褐色を呈し、還元焼成をうけていない。

この砂層は、Ⅵ－a層の堆積の前段階において激しい土砂流として流入したものと考えられる。

以上みてきたように、蔵人遺跡における古墳

時代土器は、E・F地区の所見をみるかぎり、Ⅶ層→Ⅵ－b層→F地区灰色砂層→Ⅵ－a層と変遷したと考えられる。Ⅵ－b層と灰色砂層の間に若干の時間的空白を考えることができ、さらに、Ⅶ層とⅥ－b層が比較的まとまった土器群として検出されるのに対して、須恵器出現期以降は、激しい土砂流がみとめられ、また遺物自体も混入の度合いが大きいことがわかる。これにより、この間、集落の自然環境に変化があったことが考えられるのではなかろうか。

また、最下層の砂層（Ⅷ層）から単独で出土した後期弥生式土器（170）は、本遺跡の開始期を示す一資料となろう。

(2) 古墳時代遺跡の動向

以上述べた土器の年代観により、本遺跡は弥生時代後期に始まることが明らかとなった。しかし、B地区Ⅷ層における遺物の出土状況より、弥生時代集落は今回の調査地点には存在せず、その周辺、おそらく高川の流域のやや高い地点であろうことが予想される。

古墳時代集落は庄内式期に初まり、布留式期に及ぶが、遺物量からみて、布留式期の須恵器出現期以後に密度が高く、集落としての規模が最も充実した時期と思われる。概ね5世紀代である。

6世紀のものとして、D地区で検出された小溝状遺構がある。溝内より須恵器杯細片（208）が1点検出されたのみである。B地区で出土した甕（209）も、単独の検出で、この時期では、それ以外では一点の遺物も検出されていない。調査地においては遺構をともなう遺跡の実体はないものと想定している。さすれば、古墳時代の集落は、おそくとも5世紀末葉には終束したと一応は考えておきたい。

ここで注目されるのは、東方1kmの垂水南遺跡との関連である。この遺跡は庄内式期の遺物も散見[1]されるが、住居・水田址等にともなった濃密な遺物は布留式期に相当し、遺跡の主体はこの時期にあると考えられている。両者を比較すれば、本遺跡の方が先に集落としての形成が開始され、その充実期は双方とも同一時期である。集落の終束期についても5世紀の末葉ごろと想定され、ほぼ一致するらしい。6世紀の実体は全く不明で、双方ともほとんど遺構も残さず、この点についても一致する。この時期には、かつての居住地を見捨てているらしく、その理由は洪水等の自然環境によるものか、政治的な動向があったのか、今後に検討せねばならない問題である。

7世紀になると、北方1kmに石棺を有する感神宮所在古墳があるが、7世紀の集落の実体は蔵人遺跡では断片[5]すらなく不明である。

奈良時代のものとしては、C地区西端において、河道様の砂層より須恵器・土師器が少量出土している。本遺跡が発見された当初に、黒色土器をともなう奈良時代遺物が認められているから、今後、遺構等の発見される可能性は残されている。層序からみれば、第Ⅴ層の暗灰色粘土層がこの時期に相当するが、概して層中の遺物は微量で、このⅤ層上面は鎌倉時代井戸群として中世の生活面を形成しているのである。

(3) 中世集落の時期とその性格

まず、遺跡の存続した時期であるが、本調査で検出された遺構として、上限を示した4号井戸は井戸内検出の1片の瓦器細片（白石氏Ⅱ－3期）[10]のみが根拠である。埋土中に偶然に混入したとも考えられるので、遺構の時期を断定するものではないが、少くとも本集落が鎌倉時代中葉からは継続していることも明示する資料として認識しうるものである。

次に下限であるが、E地区では、相当上層から切り込んでくる中世河道が検出されており、この河道内堆積土検出の瓦質火鉢（15）は、京都市内の検出例から、室町後半期に類例がある。[14]各区で出土している備前擂鉢はⅣ－A・B両期にまたがるが、B期はきわめて少ない。Ⅴ期のものは全くみられない。このように、江戸時代に属する陶器や、磁器の検出をほとんどみないことから、近世期にはこの地に集落はなかった可能性がつよい。現在の蔵人村がやや南側にあ

ることより、おそらく集落域が南へ移動したものとみられる。これについても文献上の発言[②]とも一致する。

以上より、中世の本集落は鎌倉中葉より、室町時代後半に至るまでの長い間継続していたことがわかった。この間、集落として断絶があったかどうかは、今回の調査では明らかにできなかった。しかし、時代の経過にしたがって地盤が上昇したことが判明しており（第４章）、これは本域の西方を流れる高川の沖積作用と考えられるから、幾度かの洪水は経過していると思われる。出土遺物でいえば、瓦器は最終末段階のものはほとんど見い出すことができず、一時的な集落の断続を示しているのかもしれない。詳細は今後の調査に待とう。

さて、集落の性格については、井戸跡以外の検出遺構がないため不明な点も多いが、鎌倉時代においては瓦器、土師質小皿、羽釜等を主体とした日常雑器が出土しており、ごく一般的な農村集落としての観がつよい。

しかし、室町時代に至ると、瓦が散見されるようになり、その瓦も屋根に葺かれた痕跡のあるものが多く、周辺に瓦葺建物の存在が推定された。C地区では石組溝を検出し、石組の中に瓦が転用され、また溝内に瓦が落ち込んでおり、瓦葺建物に密接に関連する溝状遺構と想定されるようになった。さらに、E地区中世河道からは、瓦質火鉢、明代青磁などが検出されており、室町時代以降は農民家屋にとどまらない性格の建物が存在したことがほぼ確実となった。

(4) 中世の井戸群について

中世期の遺構については、まず９基もの井戸が検出されたことがあげられる。さらに瓦質井戸枠や、井戸に転用されていた羽釜[⑭]の検出をみると、これ以上数基の井戸が存在していたようである。

検出井戸のうち、井戸枠が完存していたのは第１・２号井戸のみであり、他は井戸の廃棄に際して井戸枠用材がぬき取られているのである。さらには、中世水路の護岸・堰の用材として使用されていた角材・板材には井戸枠用材と考えられるものが多数あり、有効に資材を活用していることがわかる。

各井戸をみると、平面形態では角形、円形のタイプがあり、また上下２段構造のものや、１段構造のものもあり、多種多様であったといえる。明確に時期を決定しうる井戸跡としては、鎌倉時代[⑮]に属する２、３、４号井戸が角形井戸であり、鎌倉時代水路に転用されていた井戸枠材も角形井戸である。鎌倉時代においては、当地では角形井戸が趨勢であったのかもしれない。

室町時代のものと考えられる１号井戸は円形井戸であり、また円形の７、８、９号井戸は基底レベルより室町時代と推定しており、当地では、角形から円形へと相対的な変遷があったらしい。最近、北九州地方検出井戸で角形から円形への平面プランの変遷が報告されており、同様な傾向が指摘されているのは興味深い。[⑯]

１号井戸は、曲物を井戸枠とした例では、検出された唯一の遺例である。これは桧薄板の片面に細かい切れ目をつけ、円形に曲げたもので、通有の曲物と同様な作風を呈しているが、樹皮による結合穴がみられなかった。円筒の掘り方に、割竹２～３条を一帯として編んだ竹箍が数帯残されており、これを外側に巻いて円筒形を保持していたようである。桶と曲物の折中様なものを想定しうる。

なお、ここに述べた竹箍は７、８、９号井戸にもその一部が残存していた。また同様なものが東方約１kmの垂水町３丁目所在の垂水南遺跡検出の近世井戸にもあり、長期にわたって使用されていたようである。[⑰]

各井戸の堆積土をみる限り、井戸内の基底部には細砂が薄層状に、あるいはレンズ状に堆積している。この砂の堆積が進むにつれ、井戸としての用をはたせなくなって廃棄されたのであろうが、ほとんどの検出例では廃棄に伴っては、意図的に井戸を埋め戻した痕跡がうかがえる。

この中でも、第５号井戸のように、埋戻しに際して、竹管を垂直に差し込んだものが検出された。井戸の「息ぬき」として、各地で行われ

ていた風習であろうとされるが、この風が当地の中世期に行われていたことが確認された。[18] しかも驚くべきことに、大正期以降のものである第6号井戸において、井戸の埋戻しにおいて竹の節を打ち抜いた竹管が一本差し込まれてあった。中世以来の古習が近代に至っても脈々と受け継がれていたのである。

(5) 中世遺物について

中世遺物については、瓦器、土師質小皿、羽釜、瓦、明代青磁などがある。

瓦器椀は、白石氏編年[10]Ⅱ－3型式とみられる小破片（4号井戸内）ほかは、すべてⅢ－1、Ⅲ－2段階のものである。Ⅴ層上面に砂をともなう良好な面がC、D、E地区で明らかにされており、この面において、これらの瓦器が出土し、鎌倉時代井戸群の構築された面となっている。瓦器椀の終末については、白石氏は他地域との関連をもふまえて旧稿を補正し、[19] 瓦器は14世紀末までは存続したとされた。今回出土のものは、終末期にあたるⅢ－3、4段階のものは1点も検出されておらず、当地の資料によってこの点を検証することはできなかった。しかし後述するように、文献史料によって、至徳年間（14世紀末）に本集落が存在していることが確実であり、今後の調査の機会にこの点を論及できることを期待したい。

羽釜については、土師質羽釜（第40図）と瓦質羽釜（第41図）があるが、形態的にみても、瓦質羽釜は後出的要素がある。

型態からみれば、稲垣氏編年[11]の第2期型式から第6期型式まで認められた。土師質羽釜（28）は、第2期型式B_2に酷似しているが、これは3号井戸埋土で検出されたもので、同井戸基底埋納の瓦器椀（5、6）とも比較して、鎌倉時代後半の特徴もよく表わしているといえよう。

瓦質羽釜は、口縁部外面に2～3の段を有するもので、体部下半はヘラケズリ調整を行うなど、製作技法に新たな進展がみられる。稲垣氏が第6期型式E_1としたものに酷似する。このタイプの瓦質羽釜は、室町時代石組みに伴って1点出土したほか、室町時代後半とみられるE地区中世河道以下において出土している。これらの時期的、層序的推移を大まかに述べると、(1)鎌倉後半井戸群・水路→(2)室町前期1号井戸→(3)石組溝→(4)中世包含層Ⅳ層→(5)室町後半E地区中世河道という推移が想定される。このうち、瓦質羽釜の伴出するものは、(3)、(4)、(5)の段階であり、(3)、(4)は6型式E_1が、(5)では口縁外面の段のない小型化した瓦質羽釜が出土している。

これを実年代にあてはめてみると、鎌倉時代水路の埋没直後に掘られた2号井戸の存在や、石組溝を至徳3年（1386年）には存在した圓隆寺関連遺構と想定できること、のちに述べるように、Ⅳ層の地盤の上昇を15世紀と想定していることなどから、おおむね室町前半期において、6期型式の瓦質羽釜が出現していることになる。これに伴う備前擂鉢がⅣ－A期のものであることも、これを裏付けている。稲垣晋也氏は紀年銘を有する鉄釜例から、これを15世紀後半～16世紀初頭と想定されたが、本遺跡例と比較すると微妙な時期的異差も感じられるのである。

本遺跡の場合は、明確な遺構に伴って一括出土したものが少なく、下水工事にともなう狭幅な調査であり、必ずしも断定するものではないが、氏の想定よりやや早い時期に出現する可能性を指摘しておきたい。このタイプの瓦質羽釜は、各地の中世遺跡で比較的豊富に出土しているようであるから、今後、他の明確な共伴関係でもって検証されたい。

(6) 文献史料からみた調査成果

次に、文献史料により今回の調査をふりかえってみよう。当地は、東寺領垂水庄の一画として吹田市域でも最も古く文献に表わされるところであり、古代末からは春日社領摂津垂水西牧にも含まれ、これらについては東寺百合文書や摂津今西家文書に広く散見されるものとして、古代・中世荘園史の研究に大きな成果があった。このことは、島田次郎氏編の『日本中世村落史の研究』にも詳しく、さらに多くの詳論がある。

特に榎坂郷蔵人村は典型的な中世村落として

名を今日に残し、今回調査した中世井戸群や溝は、時期的にも、その条里坪付けからも、この中世「蔵人村」そのものなのである。

条里坪付けからみると、今回の調査地域は豊島中条の４条１里にあたり、調査地点は東から26坪、27坪、そして南側に下って34坪にあたることがわかる。[20]

これを今回の調査区により分別すると（この区分は工事の施工上の都合によって区分されたものではあるが）、A・B地区とC地区の一部は34坪に、C地区の一部とD地区は27坪に、E・F地区は26坪にあたるらしい。

幸いこの４条１里の各坪は、文治５年３月の『摂津垂水西牧榎坂郷田畠取帳』[21]に記された地域であり、当地の土地の利用形態が一目にして知られるのである。

これによると、文治５年の田畠取帳には、これに該当する坪に屋敷地はまったくみられず、このころの集落はさらに北方（旧榎坂村の方）であったことがわかるのである。

至徳３年３月の『垂水荘浜見取帳』[22]では、27・28・34坪には屋敷地がみえ、27・28坪には圓隆寺堂敷や社敷がみえ、屋敷と寺社が現われているのである。これは文献の上から、中世蔵人村を示す初見であり、これをもって蔵人村は室町初期には成立していたと解せられていた。[2]

続く寛正４年（1463年）の『摂津国垂水荘浜見取帳』[23]には、やはり27坪には「神敷５反」、28坪にも「圓隆寺堂敷四反七十歩」と示され、引き続いて寺社がみえるのである。寺院として、圓隆寺の存在は明らかであるが、神敷については寛正３年11月（1462年）の『摂津国垂水荘内検目録』[24]にみえる「八幡牛頭天王社」に相当するという。

これらの文献上の記載を、今回の調査成果からみると、新たな事実も判明するのである。

まず、中世蔵人村の成立を室町初期としたが、考古資料による限り鎌倉時代中葉にはすでに集落が存在していたことが明らかとなった。

この事実は、ただ単に「中世蔵人村」の起源が文献上の記録より遡るらしいという短絡的な結論にとどめる以上の興味ある事実を示しているようにも思える。

現在の中世荘園史の研究は、究極的には荘園内における小百姓と呼ばれる下層農民層と、名主層と呼ばれる上層農民との存在形態の評価にかかっているとされるように、[25]荘園内における各階層の経営実体の解明が不可欠の問題なのである。この観点からみると、先の田畠取帳によって、名単位で屋敷地の所在を確認しても、小百姓層をも含めた村落の実体をいかほど表現しえるかは、特に今回のように考古資料との考証を重ねる場合、注意を要する問題と思われる。すでに、この田畠取帳においても「単に、畠地として登録されている名田の中に、名主クラスに達しない小農民の宅地の存在が想定」[26]されていることから、名主屋敷地以外でも、宅地や井戸等の住居関連遺構の検出される可能性を残しているといえよう。

このような指摘からすると、文治５年の「大田文」に、名主屋敷地として記載されていない個所において、時期的にさほど下降しない時期にすでに井戸群が出現し、室町時代の蔵人村に継承されていることは注意される必要があろう。さらに憶測を豊かにするならば、これら鎌倉時代井戸群を小農層の住居に伴ったものとみることも可能かもしれない。

いずれにしても、室町初期には寺院・神社をともなった名主屋敷群として成立する、中世蔵人村に先行するものとして、それより相当古くから何らかの農民家屋が存在したのは事実である。これは中世村落の発生と変遷のパターンとして一つの好例を示したといえよう。

次に室町時代になると、至徳３年にみえる、「屋敷地」・「堂社敷地」という中世蔵人村の出現が、とりもなおさず、１号井戸等の室町時代遺構群・遺物群そのものなのである。

このころになると、瓦が出土し、34坪内石組溝の出現などから、当地に寺院が存在していたらしいことはすでに明らかにしており、この点は圓隆寺・牛頭天王社と記す文献の記載と全く一致するわけである。

応永10年（1403年）『摂津国榎坂郷名主百姓等申状』[27]は、当地の名主・百姓等が東寺垂水庄をして、三国堤を築かせてくれるように幕府に願い出た申状であるが、その中に「近比垂水庄号蔵人村成荒庄、[6]土民百姓等最少也、将亦田畠無正体、……（略）」とあり、このころ蔵人村の百姓が減り、衰退していたことがわかる。その原因は「田畠正体なく」とあるように、洪水のために田畠が荒廃してしまったためであるらしい。

ここで発掘調査の成果をふりかえってみると、室町時代前半につくられたと考えられる1号井戸や、石組溝を最後にして、室町後半期と思われる瓦製火鉢の出土した中世河道跡のレベルに大きく地盤が上昇していること（Ⅴ層からⅢ層への上昇）をE地区の土層断面図他の資料は明らかにしており、これがほぼこの時期の間に該当することから、このような事情を物語っていると推定できるのではないか。つまり第Ⅳ層から第Ⅲ層への地盤の上昇を15世紀と想定したのである。以後の調査の際には一定の指標となろう。

以上、やや仔細にのべてきたが、本遺跡は中世文献に広く記載せられているところとして歴史的意義が高く、それを考古学的調査によって追認し、また新たな事実を見出すことは、中世史研究に新視点を付すことができるはずである。

巾わずか2m余の下水管埋設にともなう調査でもあり、部分的には粗さも否定できない調査の中にあって、一部想定をも含めて、中世遺跡の全体像を大略まとめてみた。今後の平面的な調査によって諸点が補足され、また修正されんことを希望する。

〔註〕

① 吹田市教育委員会『垂水南遺跡発掘調査概報』昭和52年
② 上井久義『謎の宮敷(市史点描)』市報すいた　昭和49年
③ 『平安遺文』第35号文書
④ 関西大学考古学研究室『垂水遺跡第1次発掘調査概報』 昭和49年
⑤ 山本　彰「吹田市感神宮所在の家形石棺」『プレヒスト』No.1　昭和48年
⑥ 豊中市史編纂委員会『豊中市史史料篇1』 昭和35年
⑦ 豊中市教育委員会『利倉遺跡』 昭和51年
⑧ 吹田市教育委員会『吹田の文化財 第2集』 昭和50年
⑨ 間壁忠彦、間壁葭子「備前焼研究ノート(2)」『倉敷考古館研究集報』2　昭和41年
⑩ 白石太一郎「いわゆる瓦器に関する二、三の問題――古代末～中世初頭における土器の生産と流通に関する一考察――」『古代学研究』第54号　昭和44年
⑪ 稲垣晋也「法隆寺出土資料による土釜の編年」『大和文化研究』7-7　昭和37年
⑫ 石野博信、関川尚功『纒向』橿原考古学研究所編　昭和51年
⑬ 中村　浩「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ』大阪府教育委員会　昭和53年
⑭ 同志社大学校地学術調査委員会『同志社中学校体育館建設予定地発掘調査概要』 昭和52年
⑮ 井戸の名称については、多様な意見があるが、本書においては原則として、日色四郎氏の『日本上代井の研究』昭和42年　によった。
⑯ 横田賢次郎「大宰府検出の井戸――とくに形態分類を中心として――」『九州歴史資料館研究論集』3　昭和52年
⑰ 昭和53年5月調査
⑱ 日色四郎『日本上代井の研究』 昭和42年
⑲ 白石太一郎「越智氏居館出土の瓦器――瓦器の終末年代に関連して――」『古代学研究85』　昭和52年

⑳ 島田次郎編『日本中世村落史の研究』付図「条里復元図」による。
㉑ 『鎌倉遺文』第376・377号文書
㉒ 『大日本古文書』家わけ10の4　第92号文書
㉓ 『大日本古文書』家わけ10の4　第108号文書
㉔ 『大日本古文書』家わけ10の4　第107号文書
㉕ 小山靖憲「村落共同体と座」『日本史を学ぶ』2　昭和50年
㉖ 武藤　直「摂津垂水牧榎坂郷と集落」『地形図に歴史を読む』 昭和43年
㉗ 『大日本史料』7の6　第96号文書

あ　と　が　き

調査終了後、約1年を費して資料の整理、報告文の執筆などが行われ、やっとここに報告書を刊行することができました。

本遺跡の調査は、冬期を通じて行われ、しかも、地下鉄工事のような悪条件のもとに、常に泥水につかまりながらの調査の連続で、参加学生の労苦も並ならぬものがありました。また工事と併行して行われたため、工事関係者の多大な協力のもとに、事故もなく長期にわたる調査を無事に終了できたのです。

本書をおわるにあたって、ここに調査参加者の労苦をねぎらいたいと思います。また第8章の執筆にあたっては、関西大学文学部教授　上井久義先生から貴重な御教示を頂きました。文末ですが深く謝意を表します。

蔵人遺跡——江坂地区公共下水道事業にともなう
埋蔵文化財発掘調査報告書——

昭和54年3月31日発行

編　　集　　大阪府吹田市泉町1丁目3番40号
吹田市教育委員会

発　　行　　吹田市下水道部